

---

# ウレハ

いみたん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ウレハ

### 【Zコード】

N7681Z

### 【作者名】

いみたん

### 【あらすじ】

クリスマスの夜、真紀は逃げるよう地元へと帰郷する。

母校の回りを歩いていると、女子中学生にライブのチケットを押し売りされ、しぶしぶと公民館へと入った。

羽柴良太は、親友であるひきこもりな橋本恭介を連れ出すべく、荒療治としてライブへと出かけた。

隆は松尾淳一の紹介でバンドのヘルプを頼まれヴォーカルとしてス

テージに立つた。

ベースの男は遅れている、バンドのヴォーカルが到着するまでの間、時間稼ぎに流行曲をのコピーをしようと隆にもちかけるが、隆はこれに断固として反対した。

そのとき、会場に居合わせた、真紀を指差し、「あんたにこの曲を捧げる、メリークリスマス！」と、言った。

隆のこの行いにベースの男は更に怒りをつのらせ、襟首をつかんだ。騒然とする中、このバンドのメンバーである、山中椿は、場の空気を収めるために、ギターをかき鳴らした。

頃合いを見て、隆は歌い出した。

歌唱力の高い隆の歌声に場内は歎息とする。

居合わせた者は隆にだれも文句を言えなくなつた。

隆が会場から出て、バイクのエンジンをかけていると、隆の後を追つてきた真紀が話しかける。

オリジナルだという先ほどの、即興に驚く真紀だった。

二人は意気投合し、逃げるようになに会場を去つた。

## 『第一部 プロローグ（前書き）

この物語は、当初同人ベルゲームで、商用を考えておりましたが、諸事情により、制作を断念いたしました。

イラスト（立ち絵）、物語が半ば出来上がった状態です。  
多くの人に楽しんで頂くために、今回公開に踏み切りました。

イラスト（立ち絵）一枚絵などは、アメブロの方で展開していくつもりですので、この作品『ウレハ』をより楽しみたい方はそちらに目を通してください。

<http://ameblo.jp/imitant2/>

## 『第一部 プロローグ

恋人たちが肩を寄せ合い、色とりどりのネオンが街を包む。

だれもが寂しさとは、無縁でありたいと願う今宵焦燥感を隠した女は、電車に揺られ、都會から田舎へと帰郷していた。

時折ため息をつき、窓辺から流れる景色をぼんやりと眺めて、車内に漂う温かい雰囲気を押し扱うように沈黙している。

数少ない乗客たち、家族連れや、学生カップルは皆幸せそうな顔をし談笑していた。

その中でぽつりと、取り残されたように女は座っていた。化粧や服装がパツとしそぎ、右手には山、左手には海と、囲まれているこの田舎では、余りにも不釣り合いに見えた。

全体的には小作りな顔立ちをして、さっぱりとした印象だが、端正な顔立ちである。

「SAYAの新曲聴いた？」

「あれってクリスマスソングだよな」

学生カップルは談笑している。それを見て女は、疎ましそうに顔をゆがめた。

電車がゆっくり駅に止ると女は立ち上がった。

構内は巨人が押しつぶしたように低く、一般的な広さからすれば大分狭かった。

駅には人がまばらだった。

改札を通り、女は外に出ると、

「珍しい。この時期、この町に雪が降り積もるなんて……何があつたの？　あ、私が帰ってきたからだ」と自嘲した。

辺りを見て、目の前にあつた空席表示のタクシーに乗り込んだ。

「城西中学校までお願いします」

運転手に声をかけ女は深く腰を据えた。

少年は、扉の入り口に立ち、何かを引つ張つている。

「恭ちゃんてば！ もうライブ始まつてるから、今から行つても、クラスの人にはそんなに会わないよ」

と言つて、さらに細腕に力を込めた。

その小柄な少年は、厚ぼつた前髪で目元は隠れ、頬はそばかすで覆われていた。

「やだよ、良太君、俺」

と言つた声の主は扉の中にいて、ここから先には出まいと、冊子に手をかけている。

中にいる少年の方は体格もふつくらしており、身長もかなり高いので、小柄な少年の努力は、焼け石に水といった具合である。

「良太君の家に行くなつて言つたから出てきたのに、俺だまされるところだつた」

「だからこうして、打ち明けてるんでしよう」

小柄な少年はそれでも、負けじと引っ張つていて。

「とにかく、俺いかない」

「山中さんが参加してゐるつて言つても？」

体格の良い少年は力を緩めた。その瞬間、小柄な少年の腕はすべり、鉢植えを倒しながら転んだ。背中にある手すりから下を覗いて、

「いつたあ

「ごめん……」

「あぶないよ！ これでもう、行くしかなくなつたね」  
扉の下はおよそ、十メートルの高さがあり、落ちると笑い事ではすまない。

体格の良い少年が小柄な少年に手を貸す。

「大丈夫だよ、僕が保証する。チケットもほら！」

そう言つて、微笑すると、体格の良い少年はあいづちを打つた。

壊れかけの街灯が点滅し、夜の校舎をぼんやりと照らしている。グラウンドの端にはテニスコートがあつて、ネットが張られていた。

女は体を抱くよつにして、歩いている。

「懐かしいな、でもむなし……」

辺りを見渡すと、道路を挟んで、テニスコートから反対の方向にある公民館から明かりがもれていた。

「こんな建物あつたかな?」

と、女は言つて歩き出した。

すると入り口からサンタクロースの姿の少女が出てきて、踊り場から階下を、首を左右に振つて覗いている。

そこで、女を見つけると、

「あの　あの!　その人、」（）でライブしてゐるんですけど、見に来ませんか?」

女は訝しそうに、階段上の踊り場を見つめて、

「そこの人つて私だよね?」

と、言つて、女はその場所まで歩み寄る。

「そうですよ、今なら特別にただで!」

と言つて、サンタクロースの格好をした、少女は笑つた。

「ちょっと待つてちょっと待つて、うーん、ライブ……ライブか」女が悩んでいると、

「あの、失礼ですけどどこかで、会つたことありませんか?」

と少女は言つた。

「うまいなあ。久しぶりに、じつに帰つてきたから、それはないかな」

「わー、どうりでカッコイイ

「まあ暇だし、いいか……高校生?」

「チユウニです。わーい、それじゃ、中に入つてきてください」

「若いねえ」

と言つて女は階段を上る。中からは何やら騒がしい音が聞こえ、

それが怒鳴り声だとわかると女は、後悔したのだった。

「所詮こんなものか」

少年はそう小声で毒づいて、ステージを見下ろした。

公民館の中は学生でごった返していた。

「えーと何だつて隆くんだつけ？ ちょっとライブ中にみんなごめんな」

ベースを抱えた男は、観客に一度謝り、少年の肩に手を回した。男の金髪の頭頂部は黒く、不健康な顔立ちだった。

少年は嫌悪感を隠すことなく、中性的な顔立ちをゆがめた。

「次の曲それで行くから」

そう言つてベースの男は、楽譜をスタンドに置いた。

「俺、この曲知りませんし、楽譜読めません」

少年は一通り目を通して言つてから、ベースの男から視線を外して観客席を見つめ、

「松尾！ これつきりだ！」

と、続けた。

「そんなこと言わずにさ、学生でこの曲知らない人いないよ。後半、オリジナルの曲持つてくるんだけど、時間余りそうでさ」

ベースの男は、マイクを避けるように小声で言つた。

「だから知らないから、歌えませんって……」

少年はそう言つて、意味のないやりとりに嫌気がさしたのか、ステージの右端にぽつねんと立つ、ギターを抱えた少女の方を向いた。

「ねえ、隆君だったよね、聞いてる？」

「松尾君にヘルプ頼んで、君に来てもらったのに使えないよね……」

少年はギターを持つ少女を、睨みつけるように見つめ、少女もそれに答えて驚いたように睨み返してくる。

少女はボブカットに、エースのトランプ柄のティーシャツを着込み、チェックのミニスカートに、色落ちしている先がとがった革のブーツを履いている。愛くるしい童顔な顔つきで目尻はつり上がり、身

長は相当低かつた。

始まらないライブに、次第に観客たちの話し声が大きくなる。「わからなくてもいいからせ、適当に合わせてよ。開始早々これじや遅れてくるヴォーカルに、申し訳ないでしょ」

少年はベースの男を見上げた。

「適当に歌え？」

少年はそう言って、田の前にあつた楽譜スタンドを、勢いよくはねのけた。

「ふざけんなよ！ こつちは、やりたくもねえのに、松尾だから頼まれてやつてる。はあ？ はやりの歌のコピーやるくらいなら、バンドなんか組むんじゃねえ、義理で一千円も払えるか！ 五百円の価値もねえ！」

観客席、最前列に立っていた、面長の少年が額に手を置いた。

ベースの男は数秒惚けたしていただが、すぐに険しい顔つきに変わり、少年の襟首をつかんだ。

「テメエ、なにさまのつもりだよ！ ただのすけっとだろー！」

ベースの男はそう怒鳴った。

「それはこつちの台詞だよ。おまえがなにさまかつてんだよー。」

二人は押し合い、床にあつたコード類が散らばった。

ドラマの神経質そうな男は、ドラマスローンからやつと立ち上がり、喧嘩の仲裁に入った。

「ガキがバンドを知らないくせに」

「おーいみんな！ 特にこの男田端で来てる女子帰れ！ ガキとか高校生に言つてるぞアリエネエ！」

少年はベースの男に殴られステージの端に追いやられる。

そのとき、黒山の人だかりを避けるようにして、ライブなんて眼中にないといつよつに、顔をステージから背けて立つ女に田端がとまつた。

(こいつも俺と同じか……こうなつたら何もかも壊れてしまえ)

少年はマイクを引っつかみ、

「そこのギンガムチェックの人！」

公民館の隅にいるその女を指さして、

女は（？）自らを指さした。

「そう、あなた、センスというか雰囲気がいい。あなたにこの曲をささげるぜ！ メリークリスマス！」

と、少年は言った。

会場からはブーイングの荒らしが起きた。

「おまえもう帰れよ、クソガキが！」

と、ベースの男は肉薄した。

ライブは手がつけられないような、状態になつた。

するとそのとき、ステージのスピーカーから、大音量でギターの音が刺すように走り抜けた。

ギターを抱えた少女は目を閉じ、弦を、叩くようにはじいている。始めはただの爆音で、馬のいななくような音が、次第に整つてき

た。

少女は高速で指を操る。

観客は吸い込まれるように、彼女を注目した。

徐々に演奏はフェードアウトし、マイクを持つ少年は、ギターをひいている少女へ、視線で合図を送ると、マイクを抱え込むように持つた。

ベースの男は釈然としない様子だったが、これを期に自分の位置に戻つていった。

少年はまるで何かに魅入られたように、頭を揺らし歌い出した。

ギターはコードを変調させ、少年の歌声と重なり合つた。

ドラムとベースも、たどたどしくはあるが、ついてくる。

それらは一体となつて、少年の力強くて芯が通つた歌声に、導かれていった。

いつのまにか、観客は静まり返り聴き入つていた。

少年は掌を上にして水平に腕を上げ、半拍置いてそれを下げた。

その合図をきっかけに音が収束する。

少年はゆっくりと目を開けた、両目は涙で濡れていた。

無言でマイクを置いて、ステージを降りて歩き出す。

パチパチと拍手が起き、一気に爆発した。

少年が扉の取っ手に手をかけたとき、

「ちょっと隆君！？」

と、ベース男の声が場内に響いたが少年は、無視をし扉を開けた。モップコートのポケットに手を突っ込んで、階段を下りる。ステージのちょうど真下に、駐輪場があつて、そこにバイクはあった。

少年は、駐輪場に止めてあるバイクに、腰を掛けハンドルロックを外した。

流線型のボディ、戦闘機のよつたスタイルでワインカーはついていない。スクーターのような形をしているが、ナンバーからして原付きではないことは伺えた。

キックペダルを踏み込む。それを数回繰り返すがエンジンはかからない。

「おい、がんばれよ！」

少年はバイクに向かつて言った。

「かわいいバイク

少年が振り返ると、ギンガムチェックの服を着た女がそこにはいた。

「あ、さつきの女」

少年はそう言って、バイクのエンジンをかけるのをあきらめ、シートに腰をかけ女と向き合つた。

「歌うまいよね。題名聞かせて！」

「題名つて言つてもな……さつきできた曲だし……勝手につけていいよ」

「え？ 即興で全部やつたの？ ウソだ！ ギターの子とすいこ口ラボしてたし」

「ギターね、あれは特別。でも、さつき浮かんだメロディだし、そ

う、あんた見て作ったから、何かのイメージにはなってるかもな」

女は少年の肩をつかむと揺さぶった。

「お願いだから違つて言って、実は邦題があつたりするんでしょう?」

「アリエネエこの人しつこいよ、何、何、これつてナンパ?」

と、少年は笑いながら言った。

「声をかけたのはそつちが先!」

それから、女は妙に真剣な表情をして手を離した。

「俺は隆そつちは?」

「わたしは真紀」

「二人ともありふれた名前だな」

少年はシートから腰を上げると、全体重をかけるようにキックペダルを踏んだ。

白煙がマフラーから出て、パンパンと音が響く。

そのとき、階段の下に数人が現れた。中でも、サンタクロース姿の少女は腕を組んで、バイクにまたがる少年を見つめている。

少年は慌ててジョッキーヘルメットを被ると、

「ヘルメット貸して!」

女も慌ててそう言った。

モツズコートのファスナーを上げると、少年はバイクを走らせた。鉄骨で覆われた低い天井に、ハチの羽音のようなマフラー音が響いた。

アスファルトを滑るように進む。

雪が一人の肌を叩いた。

先頭に立つ面長の少年は、バイクにまたがる二人を見て、額に手を置いた。

サンタクロースの姿の少女は、険しい目つきで睨んでいる。

少年はニヤリと笑つてアクセルを回した。

羽柴良太は大声で、

「恭ちゃん起きて！ 新学期だよー。」  
と、言った。

橋本恭介は耳元で聞こえる、騒音から逃れようと、布団の中に潜つた。

「今日から学校行くって、約束したよね」

良太は恭介の肩を揺さぶる。

「俺、やつぱり行かない……」

「恭ちゃんは、嘘をついたりする人じゃないよね」と、言つて、良太は布団をはがした。

「わかつたから……」

「恭ちゃんが行かないなら、僕も学校休む」

恭介はやつと起き上がった。目をこすりながら、「用意するから、下回つて」と、恭介は言つて、部屋を出た。

橋本家は一階建てで、この部屋から出てすぐ右側には、外へと降りる勝手口があつた。

良太はいつも勝手口から、この部屋まできている。

恭介の両親は引きこもりな息子を思つて、良太に定期的に電話をし、外に連れ出してほしいと頼むが、良太は言われなくとも、そうするつもりだつた。

外で待つていると、恭介は出てきた。眩しそうにしている。

身長はとても高く、肥満とはいかなくとも肥満の子供くらいには太つている。

これといって顔の特徴はないが、太い眉が柔らかい印象に不釣り合いである。

良太は恭介に比べると身長の低さは際立つてゐる。

前髪は顔を隠し、陰気な印象を与えている。

「恭ちゃん、おはよう」

「お、おはよう良太君……」

それから一人は自転車で学校へと向かつた。高校は市内の外れにあって、橋本家から自転車で二十分程度の距離だった。

ここ、鶴左市は海の幸、山の幸が豊富で、日本全国でも有数のリース式海岸を備えている。県からは南東部に位置し、人口はおよそ七万人。そんな九州の田舎である。

良太はペダルを踏みながら思案した。

恭ちゃんをこれから、毎日学校に通わせるには、僕はどうすればいいんだろう……何か良い方法ないかな？ やっぱりあれしかないかな……でも、

半ば答えが出ているが、躊躇っているのだろう。

そんな良太を知つてか知らずか、恭介の表情は、学校に近づくにつれ強張つていく。

「大丈夫だつて、僕らそんな目立つ存在じゃないし、案外みんな気にしないと思つ」

「……」

二人は並走しながら話している。

「それよりさ、今期アニメつて、できよくないよね……」

良太は恭介の緊張を、和らげようとしているが、効力はないようだ。

校門に差し掛かる頃には、恭介の緊張はピークに、達しそうしていた。

「俺、やつぱり帰る……」

恭介はブレーキをかけて、止まると言つた。

「駄目だよ！」

慌てて良太も止まる。

行き交う生徒は、そんな一人を見て冷笑している。

そのとき、一人の横を、ギターを背負つた女子生徒が通り過ぎていった。

身長は低く、まるでギターに押し潰されそ�である。

良太は自転車を、恭介の横につけて、

「このままでいいの？」

と、ささやいた。

恭介は顔をしかめ、耐えるように、駐輪場へ向かった。良太も後を追いかけた。

二人は三階の21-Fと書かれている、教室に入った。

恭介の足取りは、教室に入るまで重かつた。

一人が扉を開けた瞬間、視線が集まつたが、それも長くは続かず、意外と、あつさりとしたものだった。ただ、クラスの生徒からは、疎外されている感じではあつた。

良太の席は窓際の一番後ろの席で、恭介はその前だった。恭介はおずおずと席に腰を下ろすと顔を机に向かえた。

「大丈夫？」

と、良太は声をかけたが、恭介は黙つていた。

しばらくすると担任がやってきて、ホームルームが始まった。

始業式の間、良太はクリスマスライブを思い出していた。

きつかけは朝方見かけた、山中椿だった。椿はライブ中ギターを担当していて、会場の騒ぎを収めた張本人だ。あのギター演奏がなければ、ライブは中断していたのかもしれない。

バンドをすれば、前の恭ちゃんに戻るかもしれない。

それほど、あの日のライブは、二人にとつて刺激的だったのだ。

ヴォーカルの人つて確か、A組の人だったかな……あのとき正式なメンバーじゃない、みたいなこと言つてたし……。

とにかく良太は声をかけて、バンドに誘つてみよつと考へた。

学校が終わると良太は、恭介に先に帰宅してもらい、校門近くで

A組の彼を待つた。

しばらくすると彼はやつてきた。

話しかけようとしているうちに、尾行するような形になった。  
市民体育館で右に折れて、良太も慌てて追った。  
距離を縮めた。

彼はバイクにまたがっていた。

「あの……」

良太はおごそかに言った。

「クリスマスライブで、ウォーカルをしてましたよね。すごく歌上手なんですね。僕、F組の羽柴良太と言います」

「で？ 何？」

「それでその……バンドのメンバー募集してまして、あの……お名前聞いてもよろしいですか？」

「バンド、おまえが……？ 僕は隆な」

「それでは改めてお願ひします、隆君……一緒にやつてくれませんか」

「わるい、アリエヌH……おまえ本気で言つてるそれ？ それより俺がバイクで、学校通学していくこと、ちくつたらぬさんぞ」と、言つてしまつた。

隆の突き放すような態度に、最後は何も言えない良太だった。

「間が悪かったのかな……」

良太はあきらめて、帰宅することにした。

机の棚や壁にはアニメグッズ、フィギュアや、ポスターなどがあつた。

整理された室内だつたがそれら物が圧迫している。

良太は帰宅すると部屋にすぐこもり、パソコンの電源を入れて、ネットサーフィンを始めた。

ブラウザを起動させ、検索単語を入力する。「歌手」や「バンド」といった文字が並んでいくディスプレイを、真剣な眼差しで追いか

けている。

「なるほど、バンドをするにしても、僕はどんな楽器を演奏するんだろう」「

最も大事なことを、忘れていた良太であった。

「それに、恭ちゃんは賛成してくれるの？」

ネガティブな思考に押され、溜め息がこぼれた。

僕は周りが見えてないって、昔の恭ちゃんにしかられてた……。ともかく、普段アニメソングを聴いて過ごしているので、流行曲でも聴いてみようと、「JPOP」と動画サイトで検索をかけた。一番上にあつた動画を、良太はクリックした。

すると、女性アーティストの静止画が現れ、音楽が流れ出した。クリスマスソングが流れている。

良太は曲を聴きながら、コメント欄に曰がいく。

「だれだ？ SAYAの曲無断でアップしてやつは、やめり！」

「貴重な画像ネットに流すな」

「いまどきアニメの曲を、ネットに流して注意する親切なやつがいるとはな」

「何がアニメだ、おまえらがいるから、ジャケットの表面にキモイ絵が入ったんだよ。SAYAの画像は貴重なんだよ！」

「メント欄には罵詈雑言が飛び交い、收拾がつかないような状態になっていた」。

それから良太は気になつて、匿名掲示板で同様の記事を探したが、スレッドタイトルに「一次元と三次元の戦い」などと題しているものまである。

しばらく記事を見ている限りでは、SAYAという女性シンガーの、新曲ジャケットの表面に、アニメの絵を使っていた、ということがらしい。

これだけなら何を大げさに、と感じるかもしれないが、そのSAYAというシンガーは日本で最も認知度が高い歌手で、そして音楽活動以外行っていない。テレビにもラジオにも雑誌にもでない、し

たがつてファンはCDについている、ブックレットからしか彼女の姿を見ることはできない。つまりファンは、アルバムジャケットの、アニメ挿し絵事態、気にくわないのである。

良太が掲示板を見ていると、祖母の夕食を呼ぶ声が聞こえたので、良太は部屋を出た。

夕食後しばらく、祖母と祖父とでとりとめもない団欒があつた。  
良太は恭介と同じ学区内になるために、両親とは離れて暮らしていた。

元来おばあちゃん子だった良太は、祖父母と暮らしていることに、恥ずかしいや煩わしいといった、若者特有の感情は抱いていなかつた。

夕食後、入浴を済ませ再びパソコンの前に座つて、バンドのことを探べていった。

とにかく 隆君にヴォーカルを頼むにしても……最低でも後一人、メンバーが足りないよね……ギターとベースとドラム、僕はどんな楽器が向いてるんだろう……。

「よし、うだうだ考えてても何も始まらないよね」

と、良太は言ってキーボードをカタカタと叩いた。

「バンドメンバー募集します。メンバーになりたい方は僕、羽柴良太まで連絡してください。090 - \* \* \* \* - \* \* \* \*」

それから文字をプリントアウトし、ブレザーのポケットにしまって、ベットに横になつた。

担任から掲示板利用の許可は下りたが、バンドメンバー募集という紙面を見て、以外そうに眉をひそめて言われたのだ。

「羽柴がバンドねえ……」

不謹慎だと思ったのか、担任は咳払いで口を塞いでいた。良太は今日も恭介を、学校まで登校させることに苦労したのだ。担任が教室から出て行き、どうと疲れたように席に戻り腰を下ろした。

「良太君どうしたの？」

と、恭介は聞いてきたが、

「何でもないよ」

と、バンドの件を伏せる良太だった。

恭介は案外平気そうな表情をしているが、良太はこれがずっと続くとは思っていないのだろう。些細なきっかけで登校拒否に陥るものだ。

だがしかし、原因にいたつては星の数ほどありそうだが……。

午前の授業も終わり、良太は一階に下りて、職員室横の掲示板に、昨日のうちに作成したメンバー募集の紙切れを張った。

恭介はそんな良太を見て言った。

「良太君バンドするの？」

「まだやることがあるんだ」

良太は職員室前で、大木のように突っ立っている、恭介を置いて先に行く。恭介も無言で後を追つた。

「早くしないと、お弁当食べる時間がなくなっちゃうね。僕、A組に用があるから、恭ちゃんは先に食べていいよ」

と、良太は言つて階段を上がつている。

A組の前に到着し、良太はガラス戸から中を見渡している。

そして隆を見つけると、やおら入室したのだ。

恭介は窓際に所在なげに立っている。

「あの、昨日はいきなりでした、ごめんなさい。今、大丈夫ですか？」

と、良太は言つたが、隆は歯牙にもかけていない。

机一つ並べた隆の向かい側で、弁当を食べている松尾淳一は、チラチラと隆を伺つてゐるが……。

「僕たちのバンドの、ヴォーカルになつてくれませんか？ 一人足りてませんが……先ほど職員室に、張り紙をしてきたところです」

隆は顎を突き出し、はしを置いてから言つた。

「俺、飯くつてんだけど……何おまえ？ 昨日言つたらバンドはしねえつて」

「はい、でも……昨日は間が悪かつたのかなつて思いまして……」

「今はどうだ？」

「とても悪いみたいですね……」

「で、一応聞くが、おまえの他に誰がやんの？ おまえ楽器できんの？」

「えつと……僕の他には……」

そこで良太は、廊下に立つてゐる恭介を指さして、「恭ちゃん」と、僕と……あの、言いにくいくらいんですけど、樂器はまだ、持つてません」

そこで、松尾がばつが悪そうに額に手を置いた。

「アリエネエ！ おまえおちよくなつてる？ 楽器もいいけど、見た目どうにかしろよな、なんだよその前髪、素材悪くねえんだから、努力くらいしろ、話はそれからだ！」

「はあ……見た目ですか……」

「勘違いすんなよ、俺は松尾みたいに偏見ないからな、とにかくバンドはやらない。じゃ、そういうことで」

隆はそう言つて片手をひらひらと上げた。

良太は仕方なく、引き下がり教室を出て行く。

そのとき、昼休みが終わりを告げるチャイムが鳴つた。

「『めん恭ちゃん』

良太は廊下に出て恭介に、挙むように謝った。

学校帰り恭介の家に、良太は立ち寄った。

恭介は言葉少ない良太を心配していたが、寡黙な性格から気の利いたことは言えなかつた。

良太は椅子の背もたれを逆にして座つてゐる。

恭介はベットに腰掛けっていた。

「ねえ、僕たちってさ、外見とか気にしたことなかつたよね……髪型とか、服装とか、今まで普通にしてたつもりだつたけど、普通の基準を知らない僕は、やっぱりただのオタクなのかな」

恭介は静かに聞いている。

「なんだか空回りしてる。『めんね恭ちゃん愚痴つて……』

「いいよ、俺気にしないから」

良太はしばらく目を瞑り黙り込んでいたが、家庭用ゲーム機を取り出して電源をつけて、

「だつて、おもしろいもんね。アニメやゲームつて」と言つて微笑した。

恭介は隣に座り直してコントローラーを握つた。

それから一人はしばらくゲームに没頭した。

「やつたねブイ」

ゲーム画面上では良太のキャラクターが屹立し、恭介のキャラクターが倒れ込んでいる。

良太はゲームで勝つたのだが、現実でもポーズを決めている。そのブイサインはちょっといや、かなりぶつかこうである。

「恭ちゃん、明日はちゃんと起きてね」

恭介は黙つてうなずいた。

そろそろ夕食時であるので、良太はきりのいいところでゲームを終わらせ、ゲーム機を直した。

「また明日来るよ」

「うん……」

空は茜色に染まっている。

良太を勝手口まで送る恭介は、おずおずと言った。

「良太くん、バンド本気ですか？」

「わからない、恭ちゃんはどう思つ?」

恭介が質問を質問で返されて、答えに窮していると、

「中学の頃はいじめられていつも恭ちゃんに助けてもらつたでしょ。でも高校生になって、恭ちゃんの欠席が増えて、どんどん性格が変わつて……昔の恭ちゃんは、とても静かだつたけど、じつしりしてたと思う。だからこのままじゃいけないって、でも僕何もできなくて……あのときチケット押し売りされてライブいつてさ、隆君の歌声を聴いたときにこれしかなつて感じたんだ。だから僕決めたよ、バンドをするつて! 今度は僕が恭ちゃんを助ける番だね」と、良太は言つて肩を下げる。

「バンドということを思いついたのは始業式の前日なんだよね」

「あのおれ」

と、恭介が言つたがそのときにはもう、良太は踵を返していた。

## このいの気持ち

中山椿は、夢見後心地だった。

ふらふらする足取りで、自室にある冷蔵庫を開けると、円どりさぎが描かれている箱の中からプリンを取り出した。プリンの他にも和菓子や洋菓子が幾つかあった。

机の横には鏡台があつて、鏡と向かい合ひようにプリンを食している。むしゃむしゃと。

時折体が震えている。それは口を動かす合間に左手で、ニアギターながら指を動かしているからである。

ふだん物事を深く捕らえる傾向にある椿だが、朝のいつときはこうやつて思考が奪われている。これは中山椿が停止している時間であつて、決して素ではない。

中山椿の親友である、隆がこの痴態を見れば、「ヤリとするとだろう。

今は、故合つて二人は口を聞いていない。  
食べ終わる頃には意識も目覚めており、椿はまばたきをすると、机に向かつた。

「私の足長おじさんへ」

という出だしで手紙を書き出したのだ。

手紙を書き終えると、丁寧に三つ折りにして、かわいらしい柄の封筒に収めた。

それをバッグに入れてから、椿は扉を開けた。

台所にはテーブルに突つ伏した母が、椿に気づいて、

「椿ちゃんおはよう、母さんまた、負けちゃった」と、言つた。

母は、上品そうな顔立ちではあるが、所々白髪があつてやつれて見えた。

椿はそんな母を無視し、洗面台に向かい歯磨きをした。

およそ一年前、椿は家庭内別居を始めた。

今では母子が、話すことすら珍しいのである。

ギャンブル依存症の母を何とか改心させようとしていた椿も、母が自分の机の中をあさっている姿を見て匙を投げた。

椿は孤独を知っていた。

どうしても気持ちが落ち込みやりきれない日は、ただ部屋に閉じこもりがむしゃらにギターをひいた。そうすると自然に落ち着くのだ。

物心ついたときにはギターをさわっていた。

雑然とした物置に、幼い椿が初めて演奏した、ギターがあった。

椿が幼いころ、両親は離婚した。

父が最後に残したものは、そのクラシックギターだった。

決して開かれることのないその部屋を通り過ぎるとき、椿はほっこりの被つたギター、その一角を見入ってしまうのだ。

用意が終わると、椿は家を出た。その間、母を見ようともしなかつた。

背には体と不釣り合いな、ギターを背負っていた。

県営住宅から学校まで、徒歩で十行程の距離で、椿はその日の気分によって自転車通学と徒步通学と変えていた。

道路を挟んでなか川が横たわり、橋を越えて遊歩道を通って道路を右に折れると校門から近い交差点が見えてくる。

教室に着くまで誰一人挨拶を交わすことなく、席についてからも松尾一人がすれ違いざまに、「おはよっす!」と声をかけたくらいだつた。

ホームルームが終わると担任に呼ばれた。

それは保護者の承諾が必要な、提出物が出ていないせいだった。

担任の村山は、

「昼休み先生の所に来るよ！」  
と、言つた。

午前の授業が終わり、椿は担任の言いつけ通りに、職員室に向かつた。

廊下を歩いていると、掲示板に目が留まった。

バンドメンバー募集という掲示物だった。

クリスマスライブの後、椿はそれまでバンドの練習、ギターの上達のために何とか耐えてきた、メンバーの質の悪さ、いい加減さに我慢できず、あのバンドを抜けたのだ。

そこでこのメンバー募集は渡りに船だった。

同じ学校の人なら何かと便利かもしれない。

椿は携帯のメモリーに、羽柴良太の番号を記憶させた。

溜め息をついてから、良太は首を横に振った。

「今日も駄目だつた……隆君たちと僕たちどうや、何だか住んでる世界が、違うみたいだよ……」

良太は恭介をうらめしそうに見つめて言つた。

「世界……」

「今ままじゃ駄目だつてそう思つたんだよこんなオタク！」

「バンドと関係」

「意地になつてきたかもしない。だけどさ、ダサイよりカッコイイ方がいいよね？ もてないより、もてるほうがいいよね……僕たちこれじゃ駄目だ！」

良太は話しながら興奮している。

「ライブのときの隆君、恭ちゃんも見たでしょう。あのときの歌を聴いて、僕の中に何かが駆け巡つた……そんな気がするんだ」

「俺、音楽詳しくないけど、良太君の言つてることわかる

「ごめんね、八つ当たりして」

良太はそう言つて教室へと入つていった。

恭介も後に続いた。

二人が弁当を広げているとき、良太の携帯電話が鳴つた。

恭介は良太の表情が、ころころと変わるさまを見逃さなかつた。

電話が終わると良太は喜び勇んで言った。

「恭ちゃん、バンドの後一人が決まったかも！」

待ち合わせ場所は、学校からも近い、遊歩道沿いの噴水のある公園だった。

二人は落ち着きなく辺りを見回している。

学校が終わると、恭介を引っ張るように連れてきた良太だった。恭介は芝の上に立ち空を眺めている。快晴である。

良太はここにことしている。

一人が立っている後ろから、彼女はやつてきた。

「もしかして、あなたが羽柴良太？」

良太が振り返り、恭介も振り返った。

「はい。僕が羽柴良太です」

「じゃあ、あなたが募集かけたのね、あたしは山中椿」

恭介は振り返ってすぐに、ロボットのような動きでぎこちなく固まつた。

「はい、山中さんですね。A組の」

「知ってるんなら話は早い。あたしは」

後ろのギターを指さして、

「ギター希望かな、そっちは？」

「えっと……非常に言いにくいんですけど……楽器はまだ持つてません……」

良太はそう言って、引きついた顔で恭介を伺つた。

まさか、あの山中椿が来るなんて、思つても見なかつたのである。それは恭介も同様だらう。

「え？ 誰かに貸したとか？ 壊れたとか？」

「いえ、全くの初心者です」

椿は目をすつと細め、腕を組んだ。

「あなたたちからかつてるの？ 募集じやなくて、仲良くバンドしましょうでしようそれは！」

「そうですね……」

良太はたじたじである。恭介は助けてくれそうもない。

「じゃあ、あなたたち、見た目通りのただの凸凹コンビのオタクじゃない」

「だから隆君も、とりあってくれないんだね」  
ぼそりと良太が言った一言に椿は反応した。

「何、あなたたちって隆の知り合い？」

「知り合いというか、ヴォーカルになつてもらいたくて……毎日誘つてるんですけど、断られ続けてて、見た目からなおしてこい、話はそれからだつて言われました」

「隆がそう言つたのね！」

椿は腕を組んだまま、勢いよく言つた。

「あの、本当にご迷惑かけました……僕たち出直してきます」

良太がそう言つと、

「待ちなさい！　まだ話は終わつてない、凸凹コンビー！」

二人は肩を震わせた。

「デブは遊歩道を走る！　チビはあたしについてくる！」  
恭介は、ぎこちなく首を回し一度椿を見てから、

「はいっ！」

と言つて、走り出した。

「あの、どこにいくんですか？」

と、良太は言つたが聞き入れてもらえず、先に歩き出した椿の後を追つた。

椿は住宅に寄つて、自転車に乗り換えた。

徒歩で付いてきていた良太は、それからは走りに変わった。

国道沿いにいつて、二人はコスモスタウンフリーモール、市内の中心部へと入つたのだが言わずもがな、良太は汗だくである。

暖房の効いたこぎれいな室内、奥にはソファーがあつて、入り口からすぐ近くにはカウンターがあつた。

椿は良太を無理矢理室内へと引つ張りこんでから、カウンターに立つ男に、

「ゆかりちゃんいる？」  
と言った。

「椿ちゃん、今日はどうする」

と、男は言いつつも、顔だけ振り返り奥にいる女性を見た。  
それに気づいた、女性は椿に向かって手を振つて合図をする。  
「うーん、あたしじゃないんだ。今日はこいつの髪を、どうにかしてほしいのよ」

生まれて初めての美容院で、良太は緊張している。

「どんなふうにする？」

男は良太の厚ぼつたい髪を見て言った。

「とにかく、かつこよく 無理だわ。かわいくしてくれれば」

男が良太の髪をかき上げると、

「あ、ごめ、眉もしてあげて、サービスで」

と、椿は言った。

「うちはそんなサービスやってないんだけどな、それじゃ少し待つててね」

男はそう言って、奥へといった。

「良太、あたしこれから用事あるから、帰らなきゃだけど、逃げたりしたら、メンバーになつてあげないわよ」

椿は、入り口に手をかけ振り返りながら言った。

「え、じゃ、じゃあ！ 一緒にやつてくれるんですね！」

と、良太が言った。

「まあ、あなたたち次第だわ、隆を引き入れるのは難しいわよ」

「僕、がんばりますから！」

「それじゃあね、走つてるやつの方もよろしく  
椿は出ていった。

恭介は走つていた。体は汗まみれになり、呼吸も荒くなるが足を

止めなかつた。

今まで、ただ見ていただけの存在の山中椿と、話をすることができたのだ。

それがかなつた今、走ることに何の苦労があるといつのだらう。  
一步一歩進むたびに、思考がくつきりと浮かび上がつてくる。  
今までの怠惰な自分を呪つた。

こんなことなら、瘦せておくんだつた。今さら、やう思つても遅いが、それでも完全にあきらめていた事柄に、ほんの少しだけ希望が見えた。

夕焼け色に染まる公園 良太君は何をしているんだろう……。  
恭介が遊歩道の入り口を迂回しようとした、顔を上げたそのとき、人がいたので、避けようと体を動かして走る。  
ちょうど逆光になり辺りがよく見えない。

「恭ちゃん！」

驚いて恭介は立ち止まり振り返る。  
そこには良太が立つていた。

まゆ毛を細く整え、長すぎた前髪を切り、短く無造作にまとまつたその愛らしい容姿は、童顔な良太にとてもよく似合つていて、同一人物とは思えなかつた。

「良太君？」

「そうだよ、わからなかつた？」

恭介は傍らにいくとまじまじと見た。

「俺、驚いた。本当に良太君だ」

「終わつて鏡を見たとき、僕もびっくりだよ、ねえ似合つてるかな

？」

「う、うん、すごくてそのいいと思つ俺」

良太はにっこり笑うとブイサインを作つて

「恭ちゃんやつたね、ブイ」

以前と同じオタク的動作なのだが、良太の外見が変わったことにより、とてもよくにあつていた。

恭介は口をポカンと開けた。

「あのね、恭ちゃんもバンド一緒にしてくれるよね。山中さん入ってくれるって」

恭介は良太をじっと見つめて、

「俺も……。やりたい」

と、言った。

「ほんとのほんとに?」

良太はつぶやくように囁いた。

「俺もやる!」

と、違和感のある大声で恭介は答えた。

「よかつた……撲う……恭ちゃんがいやだつていつたりもつ……」

それから一人は帰るべく並んで歩き出したわけだが、どことなく恭介はよそよそしかった。

明け方、携帯電話が鳴つた。一度、二度と呼び出し音が続く。隆は寝惚けて携帯を投げつけ、壁に当たる。

今日はこれは無視をしてやる。

隆は、「ああ」と声を漏らした。

母子快哉のものは詩闇に、一ノ子も

Nº.

隆は携帯電話を取って通話ボタンを押した。

卷之三

「どうしてわたくしつてわかつたの？」

歌謡器から「お」真紀の声が返ってきた

「うわー、うわー、うわー」

いつやつて結局隆は眠れぬまま、

隆が、切ろうとするたびに、ちょっと待つてちょっと待つてと繰り返すのだ。

「今日は学校よね、いつてらっしゃい」と、まるで自分がモーニングホールでも、しているようご、しめくくるのだ。

携帯電話を鞄にしおり、アンティークなレコードプレイヤーに、針を落として音楽を流す。六十年代のロックが流れている。その間、着替えを終わらせると、隆は居間に出了。

「お兄ちゃん、誰といつても話よるん?」  
と、妹の恵は朝食を食べながら言った。

「ついに結んだ髪の束が揺れている。

「別にだれでもいいだろうが、おまえに関係ねえ」  
「もしかしてさ、ライブのとき一人で逃げた、女人じやないん?」

隆も座り、朝食を食べる。

「メグな、受け付けしようたやろ、あの人誘つた張本人なんよ  
アリエネ工おまえか、一般人引き入れたやつは」

「あの日、椿さんと仲直りした?」

「いや……」

妹は肩を落とした。

「三人でせつかく計画練ったのに……おにいちゃんのバカ」と、言つて、恵は立ち上がつた。

「なんだ計画つて、俺聞いてねえよ」

「知らないのは、おにいちゃんだけ」

それから妹は、浴室の方へ歯磨きをしに向かつた。  
隆は（？）で朝食を食べ上げると自室に戻つた。  
しばらく音楽に耳をかたむけていた。

すると用意を終えた恵がやつてきて、「お母さん夜勤明けで、今寝とるけんな」

と言つて、恵はどたばたと足音を立て学校へ向かつた。  
隆はゆっくりと浴室に続く扉を開けると、泥棒のような足取りで置みを踏んだ。

奥には、母が寝ているのが見える。

壁際に乱雑に積み上げられていた、漫畫本が揺れて落ちた。  
すると、母はぬつと上半身だけ起こして、「バタバタうるせえ！」

と、怒鳴つて隣にあつた枕を投げつけた。

隆は思わず悲鳴をあげそうになつたが、何とかこらえた。  
洗面台についたときには、おもわず溜め息がもれた。

「あぶねえ、起こしたら殺される」と、言つて、歯磨きを始めた。

顔を洗つてタオルで拭く。

「計画つて何だよ」

自室に戻つて用意を終えると玄関に向かつた。

隆はバイクのエンジンをかけると、道路に走り出た。

形状はスクーターのようだが、イタリア製のバイクで排気量は五百ccである。

学校では、原動機付き自転車の取得は校則で認められているが、自動二輪の免許は校則違反に当たる。

しかし、外見がスクーターにしか見えないことと、生徒の自由を重んじる校風、白紙の生徒手帳とこの学校では呼ばれているが基本的には校則が、あつてないような状態になつていて。

そのまま学校まで乗つていくことはできないので、市民体育館にバイクを止めて、そこから徒步で学校に向かつた。

ちょうど交差点で松尾淳一が、にやにやと笑いながら隆に話しかけた。太い眉が印象的で横にも縦にも身体は大きい。

「よつ、眠そうな顔してるなあ」と、肩を回してきたので、

「暑苦しいぞ、おっさん」と、隆がやり返す。

「俺のどこがおっさんだ?」「

信号が青に変わり歩き出す。

「すべてが」

「じゃあおまえは、オカ」「

「それ以上言つたらゆるさん!」

ちょうど、校門が見えてきて、横断歩道を一人は渡つている。

そのとき、山中椿がギターを背負つて歩いているのが一人の視界に入った。

松尾は、

「今日も一匹狼ですか、山中はほんとにクールだぜ、ま、そんな俺はアウトローだが」

と、椿を見て言った。

「おまえのどこがアウトローだよ」

チャイムが鳴つたので一人は急いで教室に向かつた。

ホームルームが終わると、隆は担任の村山の下へいった。

「先生ビデオまだ？」

「悪いな。先生まだ、ダビングできてない。もうちょっと待て  
「ま、大事にしてくれるんなら、いつでもいいけど」「  
「しかし、よくあつたな、何年も前の特番の映像」

「母さんが残してくれてたから」

「そうか、先生悪いこと聞いた」

「いや、いいよ。それより、どうビデオ？」

「凄いなあ、まさにあのバンドの音楽だったよ。死して尚語り継が  
れる」

「そうそ、で、テープの音源で音悪い部分は「一ラス入れたりね  
「六十年代のロックで、リーダー死んでいるから、本格的な再結成  
は無理だ。でも、先生泣いちゃつたぞ」

「俺も俺も」

隆は興奮し、饒舌になりつつある。

そこでチャイムが鳴つて、

担任は隆の肩を軽く叩いて、教室を出て行つた。

昼休みになり、松尾と昼食を食べている。

「それ、メグちゃんの手作りだろ、いいな

「別に普通だろ、何がいいんだ？」

「おまえってやつは、女心もとい、妹心のわからんやつだな

「アリエネ弁当」ときで大げさだな」

「じゃあくれ

松尾が隆の弁当に箸を落とすとするが、隆は「う」とく避けていた。

そんな隆を生温かい皿で見ている松尾。

「ライブのとき、メグちゃんのサンタ姿、かわいかつたぞ」

松尾がそう言つと、隆は思い出したように、

「おまえさ、恵と何かたくさんでただろ」

「何のことだか

「椿のことだ

「何のことだか

そう言つてると、後ろから声がした。

「あの……隆さんバンドの件でお話があるんですけど、今いいですか？」

声だけを聞いて隆は、辛辣な表情を作つた。

「おまえな、いい加減あきらめろよ」

と、振り返つて一瞬だれと話をしているか喪失した。

「僕、少しさましになりましたか？」

良太は恥ずかしそうに、はにかみながら言つた。

「驚いた！ 食つてるもの吐きそつ

良太は笑い声を上げた。

「おまえさ、えっと、羽柴……良太だよな？」

「はい、そうです」

「すげえな、デヴューしたな！ 遅い高校デヴューおめでとうな。まさかここまで変わるとほ

松尾も驚いている。

「あ、ありがとう」「やれこまますー」

「前向きなオタクだなとは思つてたが、顔と内面が合致したな。ああ、俺、そこらへんにいる、趣味も情熱も何もないやつより、オタクの方がまじだと思つてるから、安心しない」

良太はまじまじと聴いている。

「みんなが好きと言つたら好き、ファッショニシろ、音楽にしろ。個性も何もねえからな……これからが大変だぞ、とにかく、自分の色を見つける、雑誌もみなきやな、しかしそくがんばった」良太は涙ぐんでいる。

「じゃ、じゃあ、一緒にやつてくれるんですね？」

「それとこれとは話が違う」

松尾が額に手を置いた。

「あの、約束が……」

「何？ 僕、おまえが変わつたら話は聞くつて言つたけど、入るとは言つてねえ」

「そうでしたね……でも僕絶対にあきらめませんから」

「ま、でも、これからも気軽に話しかけれ、じゃあな」

良太は教室から出ていった。

土手の小道には、重そうな衣服を着込んでジョギングしている主婦。

その下、河川と青い草の斜面に挟まれた広場には、犬の散歩をする少女、

隆は学校が終わると、家には帰宅せず、近所の土手で川縁の石段に腰をかけて、首からノートをぶら下げている。

目を閉じ、息を吸い込み、歌い出した。

その歌声はこの光景に違和感を与えず、空氣のよつに透明に流れていった。

時折、口を動かすのを止めたかと思えば、ノートに何かを書き込んでいた。

隆が父、宏大の影響で六十年代の音楽を好きになり、初めて歌つたのがこの場所だったのだ。それからというもの、毎日隆は歌つた。

宏大は、二歳の隆が英語で「LUCY」と発し、歌い出したたそのとき、大粒の涙を流して喜んだのだ。

幼い隆は抱きしめられながらも、

宏大に対して、こうすれば喜んでくれるんだ。と感じ、ますます歌にのめり込んでいった。

それと知らずに歌うという英才教育を受けていたのだ。

隆の家庭は、世間一般家庭とは少々異なつており、父、宏大は女装している姿が普通であつたし、家事をこなしているのも当たり前であつた。

母、涼子は市内にある病院で看護師長をしている。  
夜勤明けで機嫌の悪い涼子に、優しく声をかけマッサージをして  
いた、宏大の姿がそこにはあつた。  
宏大が亡くなつてからとくもの、涼子と隆はよくいさかいを起  
こし親子喧嘩がたえなかつた。

それは、当たり前の母を父親として接してきたせいだらう。  
事実隆は、宏大のことを母さんと呼んでいたし、涼子のことを父  
さんと呼んでいたのだから……。

この場所にくれば宏大の、あの後ろ姿をいつも思い出す。  
エプロンをして、長い髪の毛を後ろでまとめたその様子を、  
隆は歌い終わると立ち上がつた。

川面を見つめ、ふと羽柴良太のことを考えた。  
放課後良太に廊下で出くわし、バンドの件を断り続けているのに  
も関わらず、元気よく「さよなら」と言つてきた。  
不思議なやつだ、隆はそう思った。

夕食どきになると、涼子はのろのろと起きて来て、恵の作った料理に舌鼓を打つ。

ビールを飲んで、

「うめえ！」

「お母さんオヤジくさいからやめて」

「バカ息子、メグが言つた長電話の相手はだれだ、女でもできたか？」

夕食に手をつけよつとした隆に涼子が言つた。

「友達友達」

「おまえ友達いたか？」

「失礼な」

「松尾君に椿ちやん？」

「……」

「メグが言つにほ、ライブのとき女と逃げたらしいな、バカ息子」涼子はニヤニヤと笑つてゐる。

「恵！」

隆が一喝すると、

「だつて、おにいちゃんが悪いんよ…………」

と、言つて恵はテレビの方を向いた。

「おまえには関係ねえ」

「何イ――」

涼子は怒鳴りながら隆の眉間に箸を直撃させる。

「もう、一人ともやめてよ。SAYAの曲が聴こえないから、テレビは音楽番組をやつていて、ランギングを行つていた。女性アーティストの歌が流れている。

「おまえさ、食べるのやめてまで、見るもんじゃねえだろ」

「おにいちゃんと音楽の話したくない。SAYAは違うんよー。」

「おいバカ息子、妹の夢を壊すな。おまえと、宏大さんは音楽の話になると、斜め上をいきすぎている」

「俺のことばいいけど、母さんのことけなすなよ！――ボケ――」

涼子はさつと立ち上がつた。

「やめてよ――もう……おねがいやけん――」

多少の喧嘩ならとりあわない恵だが、さすがに止めに入つた。静まり返る居間、隆は夕食も早々に切り上げ部屋にこもつた。涼子は仏頂面で一升瓶の焼酎をグラスにくむ。

恵は番組が終わると食器を片付け始め、台所から洗い物をする音が寂しく響いた。

「いつもの時間に真紀から電話がかかつたが、隆は今までのようじ、元氣だ。

放置することもなくすぐに出た。

そして隆は、夢うつつの中、なぜ宏大が死んでしまったのか、どうして歌が好きなのかと、いったことを淡々と真紀に聞かせた。

その日は一言も真紀は「ちょっと待ってちょっと待って」とは言わなかつた。

## 今夜は一人かい？

小城舞は都内にあるマンショングループのエレベーターの中で、茜色に染まる空を見上げて、溜め息をついた。

最上階でエレベーターは止まる。ホールにあつた豪奢な飾りをいともせずに、軽快な足取りで歩いていった。

紺色のスースに眼鏡をかけ、ワンレンジスカットの髪を耳にかける。

扉の前に立つとワイヤレス送信機を使って、施錠を解除した。

舞は靴を脱ぐとすたすたと、リビングまで歩いて革張りのソファーに、携帯電話を握りしめて眠る真紀を見て、深い溜め息をついた。

「真紀さん、起きてください！」

真紀はうなつて寝返りを打つ。

「今、何時だと思ってるんですか！ 地元に帰つて、自堕落なところが少しさは直ると思ったんですけど……全く変わっていませんね」

舞は真紀の肩を揺する、そのとき携帯電話が床に落ちた。

それを拾つて、着信履歴を眺めてから言つた。

「今日も例の少年と話をしていたんですね。こんなに長い時間

真紀は薄めを開け、それから驚いたように手を伸ばし、携帯電話を奪取した。

「ちょっと、もう、舞ちゃんやめてよ……それって、プライバシーの侵害っていうんだよ……ひどいよ……」

真紀は寝ぼけ眼をこすり、ソファーに座り直して言つた。

「それで、そろそろ仕事しませんか？」

「私は社長令嬢だから、仕事なんてしなくていいし

そんなことを言つ真紀を見て、舞は軽い笑い声を上げた。

「社会的に迫害されそうな、恋愛をしている真紀さん

舞はそう言いながらソファーに腰をかけた。

「何それ、恋愛じゃないよ

「では何ですか？」

「友達？いつもはね、私がとんでもない時間に電話をかけひやうから、怒るのね。でも、今日は違った」

「ちなみに何時くらいにかけているんですか？」

「朝の四時くらい」

「普通怒るでしょ？」

舞はそう言ってからひとしきり笑った。

「でもね。今日は何だかね。とてもシリアスな話をしたんだ。どうして歌い出したとか、母親についてだととかね」

真紀は誇らしげに言った。

「真紀さんが言っていた。その場で驚くようなメロディを紡ぎ上げ、それをとんでもない美声で歌いあげたっていう、彼の話ですよね？」

真紀はうなずいた。

「私はそんな妄想めいた話は信じられません。そもそも真紀さんはそのとき、仕事のストレスというフィルターがかかつてましたしね」

「信じてよー！」

「はいはい。そもそも地元へ里帰りを進めた私が、そのときの真紀さんの精神状態を一番よく知っていますから、それで、少しはおちつきましたか？」

真紀は黙つて、唇を噛んでいる。

「もうすぐですよ、契約が切り替わる日まで……」

舞は柔和に言った。

「わかつてゐるから、やらないと駄目だつて……大丈夫だから……」

真紀は目を閉じて言った。

「そろそろ、着替えましょうか。顔を洗つたり、朝食？夕食？を食べたりしないと、いけませんしね」

そう言って舞はキツチンへ向かつたが、真紀は慌てて声をかけた。

「あの、舞ちゃん……わたしが明日また、地元へ帰るって言つても怒らない？」

舞は驚いて振り返り、

「重傷ですね……彼、そんなに凄かつたんですか？ 私には到底信じられませんね。プロデュースでもしてみますか？」 真紀さんの社長令嬢としての資金で」

と言つて、舞は拳を丸め口に当てるとクスリと笑つた。

「金持ちの道楽ですから」

真紀は起き上がり浴室に向かつた。

「コンビニエンスストアの硝子の壁を見ても、雑誌に目を通す。そんなことをかれこれ、一時間ほど良太は続けていた。

椿に美容院に連れていかれて、容姿が変わってからというものの、いまだに鏡に映る自分を見ると、どことなく気恥ずかしさを感じた。隆に雑誌を読めと言われ、次の日噴水公園で椿にも、同じようなことを言われた良太だったが、パラパラとページをめくりながら、一体何が良くてどれが悪いのかがわからないのだ。雑誌にしても、ストリート系のファッショングや、モデルばかりが写っている、ブランド志向な服が多数載つている雑誌もある。

良太はそんな中でも、同じような年齢の子たちが多く映つて、趣味や年齢が記載している本を取ると、レジに向かつた。

良太にはまた一つ小さな悩みが生まれた。

恭介の態度があれ以降、よそよそしいのだ。

毎朝向かいにいくとすでに起きているし、帰りはいつも一人で教室から出ていたのに、校門を少し過ぎた所で待つていた。

そんなことを考えながら、家路についていると、後ろから声がした。

「いきなりごめん。高校どこ？」

良太は横にやつてきた女子二人に見覚えはなかつた。

「わたしたちと友達にならない？」

「え？ 僕のことですか？」

「カワイイ僕つて、ねえ佐伯、僕とか言つてこの子」

二人組の女子は、髪の毛を染めてスカートは短かつた。

佐伯と言つた女子は良太と同じ年くらいに見えたが、もう一人はその子からすれば大人っぽく見えた。

「あしたたちもコンビニいたんだけど、すつごいカワイイ子いるなつて、追いかけてきたんだよね」

良太は唇を震わせながら、

「かわいいって僕のことですか？」

女子二人はあいづちを打つた。

それを横目で見ると、良太は駆けだした。

女子に目もくれず、走つた。

呼吸は荒くなり、緊張で体が浮いているような感覚だった。そのまま家にたどりつくと、自室までいっきに駆け込んだ。良太はしばらく身動きができなかつた。

運動靴を履いて、頬をパンパンと一回叩いた。

勝手口の扉を開けて、一階から階段を降りて、道路に出ると恭介は土手に向かつた。

土手の小道につくと軽い準備運動を始めた。

それが終わると、走りだした。

時折すれ違う人たちは、まだ走り始めて間もない恭介を、温かく迎えてくれたようだ。

今もすれ違ひざまに会釈をされ、それに答え軽く頭を下げた恭介だつた。

次第に体が重くなり、汗が玉のように流れだす。

小道から河川の下の道を通りて一周する、それを繰り返すのだ。

恭介は椿に言われこうやつて、朝と夜に土手を走るようにしたのだが、運動は苦手でも走ることは、自分に向いているなど感じたのである。

恭介は、人に何かを言わねながらするよりも、淡々と作業を続け

るようなことに向いていた。

動いているときは何も考えなくてすむ。

しばらく走り、川縁の石段で休憩をとる。

恭介は良太と以前のように、接することができない、自分に腹を立てていた。

それだけ良太の見た目が変化したのだろうが、どうもうまく、口が回らなくなってしまうのだった。

臆病な自分。今までそれが当たり前だった。椿と話をして、良太の外見が変化して、いかに自分が情けないな存在か、理解できるようになっていた。

良太の前向きな性格を容姿が更に磨きをかけ、恭介には眩しく映つた。

(とにかく今は何も考えるな)

恭介は立ち上がりジョギングを再開した。すると、後ろの方から足音がし横に並んだ。

「疲れるね、走るつて」

良太だった。暗くて顔はよく見えないが、

「よくここがわかつたね、良太君」

「だつて、恭ちゃんの家に行つたからね」

「そつか

それから一人は並走した。

しばらく走つていた良太だつたが、

「じめ、僕には無理」

そう言つて弱音を吐くと、立ち止まつた。

「ここで待つてるから」

恭介は片手を擧げる。

恭介が一周し戻つてくる頃には、良太は自動販売機でお茶を買って、自分はオレンジジュースを買った。

良太を待たせて悪いとも思つたが、すぐにやめてしまつてはジョギングの意味がないので、数周土手を回ることにした。

恭介は息を深く吸い込む、ゼエゼエと喉が鳴った。肩に力が入り、フォームも崩ってきた。普段使っていない筋肉は悲鳴を上げている。良太は恭介が走つてきたので手を横に出した。しかし恭介にタッチする余裕はない。

一周、二周、三週目になつて異変は訪れた。

ゼエゼエと喉を鳴らしていた恭介はそれがヒューヒューと高音で鳴つていることに気づいた。歯を食いしばり、何とか街頭がある良太の傍らまでいくと、背を曲げた。

「おつかれさま」

良太は恭介にお茶を渡す。

返事をしない恭介。

「どうしたの？」

良太は恭介を覗き込んだ。顔を背けるがすぐに気づいた。  
息を吸い込むと同時に顔が震えているのだ。

「恭ちゃん！」

良太は慌てて背中をさするが何の効果も現さない。

「どうすれい？ 僕どうすればいい？」

「ベットの棚に、吸入器が……あるから……」

恭介は苦しそうに途切れ途切れ言つた。

「それを持ってくればいいの？」

恭介は頷いた。

良太は全速力で恭介の家へと走つた。

心配そうに恭介を見つめる良太。

今では呼吸も收まりベットに上がり腰掛けている。

良太は吸入器を取りに戻つて、恭介が使うまで気が気がではなかつた。

徐々に呼吸は整つて、一人は部屋へと戻つてきたが、その間終始無言だつた。

「俺、喘息持ちなんだ」

「こつからなの？ デウして教えてくれなかつたの？」

矢継ぎ早に尋ねる良太。

「三歳からで小学校一年生くらじになるまで、まともに学校には行けなかつた。いつも体育の時間になるの憂鬱で、マラソンのたびに見学してるとみんなに白い田で見られるし、それからは、ぎりぎりまで耐えるようになつて、誰にもこのことを話せなくなつた」

恭介は良太と顔を合わせないよつとしている。

「それで恭ちゃん欠席が増えたんだ……」

良太はショックだつた。自分は恭介を救うと言いながらも、結局恭介の悩みすら訊き出すことができていなかつたのだから……。

「俺 、『Jめん……』

「謝るのは僕の方だよ、恭ちゃんの苦しみを知らなかつたから」  
静寂が一人を包んだ。

「寝るのが怖い」

「どうして？ まさか寝ると喘息がでちゃうの？」

「夜中から朝方にかけてよく発作が起きるから」

「今日は僕が恭ちゃんが眠るまで起きてるから、安心して、発作も大丈夫だよきっと」

「良太君に悪い……」

「いいんだよ。僕恭ちゃんにやつと何かできる、その準備ができると思うんだ。駄目だつて言つても無駄だよ」

良太はそう言つて笑つた。

「ゲームしよう」

恭介はそう言つてゲーム機を引つ張り出して、電源をつけた。

良太は横に座りコントローラーを握る。

恭介の中から良太へのよそよそしさは、もう感じられなかつた。

隆はいつもの時間に、珍しく真紀から電話がかからなかつたので、朝から携帯電話を操作している。

そんな姿を見て松尾は言った。

「今日は雨か……隆がらしくない」としてゐる、それも「うれしさと」「うるせえ別にいいじゃねえか」

「悪いなんてたれもいつてないぞ」

と、松尾は隆の様子を探つた。どうやら今日は機嫌が悪いらしい。隆は気分屋な所があり、小さなことに松尾もこだわらない主義なので、友達として二人はうまくいっているのだ。

二人は校門を抜けて生徒用玄関にさしかかる。

ちょうどそのとき山中椿が横を通り過ぎ、

「おはようつす！」と、松尾が元気よく挨拶をすると、椿も軽く手を上げた。

その様子を横目で隆は見ても、話しかけよつとはしなかつた。

「土曜だし、どこか遊びにでも行くか？」

と、松尾が言つたので、隆は、

「まかせるわ」

と、やる気なく返した。

「じゃあ、フルハウスでも行くか」

「そうだな……久しぶりにマスターとセッションでもしますか」  
隆はやつと普段の調子を取り戻し、教室に入つた。

学校も終わり生徒たちは三々五々と帰宅して行く、

隆は携帯を片手に、松尾とともに校門を過ぎようとしている。

その少し後ろには良太が、話す機会を探りながらついて行く。椿もこの後噴水公園集合をかけてるので、良太と恭介からは多少距離があつたが、四人を視界に捕らえながら歩いている。

交差点に隆たちがさしかかると、隆の表情が驚きに変わつていつた。

電信柱の横に真紀がサングラスをかけ、ライブのときのギンガムチェックの服装で隆を待つていた。

「今日は遊ぶのやめておくか」

と、松尾は言った。

そんな声も無視をして隆は小走りで、横断歩道を渡ると真紀の腕をつかんで言つた。

「おまえ、アリエネトよ。こんな所で何してんだよ」

「隆君を驚かそうと思って、待つてた」

「みんなに見られるだろ！」

と、隆が言うと、真紀は至つて普通に。

「見られて悪いようなことしてないし」

松尾、良太、恭介、椿、ライブに来た人は、当然そのインパクトのある格好ですぐにあのときのと合点がいつただろう。他のクラスの者たちや、違う学年の生徒まで奇異の眼差しを向けている。

良太は、今日もバンドの件で、隆に話しかけようとしたときに、隆がちょうど走り出したので呆気にとられた。恭介も同様である。椿は顔を背けるようにして、交差点を渡つた。松尾はそんな椿を追いかけていく。

隆は、恥ずかしさのあまり興奮した様子で、

「いいから来い！」

と、言って、真紀を引っ張るように歩き出した。

道路を渡り、市民体育館横の間道に入つた。

「ちょっと待つて、そんなに急がないで、寝てないし、飛行機とタクシーでもうくたくた……どこかで

「来るなら来るって言えよ！」

「来たよ」

「今言つてもおせえよ……みんなに誤解されたな。ライブでナンパした女と付き合つてるって」

「どうでもいいじゃない、そんなこと。それより、疲れたし、おなかすいた」

隆は興奮を抑えるように半拍置いて、  
「わかつたよ、とりあえず予定通り、知り合いが働いている喫茶店に向かう、まつたく……」

二人は、しばらく歩いて、モスグリーンの外壁でフルハウスという看板が出ている喫茶店に入った。

鈴の音が店内に流れるど、六十代前後の白髪混じりのマスターが奥からやってきた。

「タカシじゃないか、元気にやつてたかい」

「久しぶり、マスター」

隆はそう言つて空いている席に座つた。

店内は広々としており、小さなステージまで設けられていた。

店のアンティークな調度品を引き立てるような音楽が流れている。

「雰囲気いいね、ここ」

真紀は辺りを見渡して言つた。

「だる。ま、親と仲がいいからな、ここ」のマスターは、それで俺もよく来てる

「ステージがあるよ」

「夜になると、渋めな老人達が集まってライブやるんだよ。俺もたまに参加する」

「本当、隆君つていろいろセンスいいよね。何人女人の人泣かせたの？」

「おまえ俺が遊び人だと思つてるだろ」「？」

「違うの？」「？」

ちょうど、マスターがやつてきておしほりを置いた。

そのままカウンターの中に入りそうだったので、

「マスター、なんか食べる物作つて」

「おや、めずらしい。注文するのかい」

「今日はだべつてるだけじゃないから」

隆は笑いながら言った。

「紹介して？」

真紀は不服そうに言った。

「こいつは真紀、年齢や詳しい住所は知らん。東京に住んでる、社長令嬢らしいよ」

と、隆は言った。

マスターは軽く笑いながら、

「もしかして、声でもかけたのかい？ めずらしいな、タカシもそんなことするんだな……しかし君も災難だつたね。涼子の息子だから口が悪いからね、コイツは」

「隆君つて遊び人じゃないんですか？」

真紀はおしゃりで手を拭きながら言った。

「とんでもない。椿ちゃん以外、女の子連れてきたことないからね」と、マスターは真紀に言ってから隆の顔色見た。

「椿ちゃんつて？」

「別に……」

「あれから長いね、隆」

と、マスターは言って、隆が怒りだしそうに見つめてきたので、「おつと、私は何か作つてくるよ。聴きたい曲があつたらリクエストして」

と、言って奥へ向かつた。

「ねえ、隆君、椿つて誰？ どういう関係？」

「別に……クリスマスライブのときのギター担当のやつ」

隆が吐き捨てるように言つと、

「なるほどね、特別の人か」

真紀は揶揄するように言った。

「真紀、しつこいぞ」

「ごめんね、喧嘩の原因は何かとか、そんなことは聞かないから」

そう言つて真紀はつくつくと笑つてから、壁にある写真を見つめた。

「これつてもしかして、お母さん？　あ、お父さんって言った方がいいのかな？」

真紀は古い写真に[写]る、ちょっと田が鋭いポーテールの女性を見て言った。

「それ涼子だよ。やな田つきしてやがる」

「似てる似てる。じゃあ、この横にいる人があ母さん？」

「うん、涼子が睨んでる人な」

そういう言つてるとマスターが軽食をお盆に乗せて、

「こんなものしか出来なくて、ごめんね」

と、言つた。

「いえいえ、すくへおいしそうです。いただきます」

二人は料理に舌鼓を打つた。

食事を終えしばらく談笑してから喫茶店を出た。

市民体育館まで歩いて、バイクに乗つた。

真紀はギンガムチェックのヘルメットと自分をしきりに見て、「なんかギラギラしてるよ」

と、楽しそうに言つた。

「このメットがあつたから、真紀に反応したんだろうな」

隆はキックペダルを踏みながら言つた。

何度もペダルを踏むが、エンジンはかからない。

「いつも調子悪いの？」

「これが当たり前、旧車だからな」

「きゅうしゃ？」

「だから、昔のバイクで、おまけに並行輸入だから、ワインカーなくとも違反じゃない」

「じゃあこれ、本物なんだ」

隆が蹴り疲れて、

「押しがけでもするか……」

と、言つているとエンジンはかかつた。

真紀が後ろに腰掛けるのを確認して、バイクは走り出した。

大通りへ出て、学校を迂回するように駅に向かつた。

しばらく市内をぐるりと回り、隆は自分の家を教えたりしながら、真紀が行きたいという場所のリクエストにも応じた。

それから隆は目的地に行くために海岸線に続く道路に出た。

潮の香りが漂う海辺は、手でつかめそうなほど近くだった。

ゴツゴツとした岩場にカモメが止まっている。

錆びたガードレールの横を、黄色い帽子を被つた幼子たちが、規

則正しく列を作つて歩いている。

頭巾を被つた老人は、海に向かつて背伸びをしている。

バイクは軽快に走り隆は、およそ三十分おきにバイクを止めて、休憩を入れた。

バイクは、実際に乗つていると疲れる乗り物なのである。

港には小舟が止まつていて。

「気持ちいい、最高！ 都合じやちよつとこんなことできないよね」と、真紀はヘルメットを脱いで言った。

「俺は疲れるけどな」

隆はそう言つて、バイクをスタンドで固定して、その上に横になるように座つた。

「歌うよになつたきつかけは何ですか？」

真紀はおもむろに言つた。

「何だ、いきなり？」

「いいから答えて！」

「電話で言つただろう……」

「もう一度」

「土手だったかな、母さんが言つには一歳のときだったらしい。今思つと子供心にこつすれば親が喜ぶつて思つたのかな」と、隆が遠くを見て言つた。

「なるほどね。ありがとう」

「おまえ、金持ちだろ、どうしてこんな田舎まで来て、俺といふん

だ？ 他にもいるだろ、友達とか家族とか」

隆がそつ言つと、真紀は唇を噛んで言つた。

「強いて言つなら、現実逃避かな。ほら、どつこいつもなにときつてあるでしょ」「う

「今がそのときなのか？」

「もう、いいから行こう。時間は有限だよ」

「わかったよ」

隆がバイクに座り直して、真紀が後ろに乗りのを確認すると、バイクは走りだした。

バイクは海外沿いをしばらく走り、

瀬会い海岸公園という標識がある道に入つて行つた。

大きさで表すとグラウンドくらいはあるだろう、駐車場があつて、

その奥にはログハウスが何軒か建つていた。

隆はバイクを止める。

「ついたぞ、今日の最終目的地」

と、言つてスタンンドを固定すると、砂浜の方へ歩き出した。

「凄い、綺麗な海」

と、真紀も言つて、小走りに隆を追いかけた。

びつしつと白い砂が海岸にあつた。

隆は石段に腰を下ろした。その隣に真紀も腰掛ける。

夕日が水平線に落ちようとしている。

打ち寄せる波、キラキラと銀色に輝いている。

「一人でもたまに来る」

「椿ちゃんど？」

隆は真紀をにらみ、

「あいつとも来たことがある

「そつか。寒いけど、来た甲斐あった、ありがとう」

「別に礼を言われるほどでもねえよ、遠ごとにひからわざわざ来て  
るんだる」「う

真紀は隆の横顔見て、笑つた。

「質問！」

隆は嫌そうに眉を寄せた。

「詞を書くときはどんなときですか？」

「辛いことがあって、それがちょっと落ち着いたとき」

隆がそう言つてゐるときに、真紀は隆のモツズコートのポケットに手を入れた。

「おい！」

と、隆が言つたが、無視をして話しを続けた。

「凄い悩みがあつて、それでも前に進まないと駄目だつてときは、隆君ならどうする？」

「だから、その悩みを打ち明けろよ」

「やだ、本質でいいから答えて」

「田を閉じて前に進むしかないだら、回りが見えなくて、つまづくかもしれないけどな」

真紀は隆の横顔じつと見て、それから海を眺めた。

「この上に展望台あるけど、どうする、行くか？」

真紀は立ち上がり、

「行く行く！」

と、答えたのだ。

木立に囲まれた一角に細い通路があつて、その先に開けた場所があつた。

一人はゆっくりとそこを登つて行つた。

木々の間には落ちた椿の花が地面に散乱している。

慰靈碑が高くそびえたち、隣にはお手洗いがあった。

その奥に、コンクリートの建築物があつて、その下の階はカーテンが閉じきついていた。

隆は建物の横に取り付けられた、階段を上がる。

真紀も後ろからついてきている。

一階に上ると広さ的には四畳ほどの空間があつて、無骨な大きな双眼鏡が二つ並んで立っていた。

展望台から下は大海原が広がっている。所々に明かりがあつて、それがからうじて船だと判別できた。

真紀は壁に手をついて遠くを見ている。

「隆君って本当は遊び人でしょ？」  
と、からかうように言った。

「そんなことねえって」

「そのルックスで、この雰囲気に当たられて拒否反応を示す女人、あまりいないと思うな、わたし」

「はいはい、ちょっと大人だと思つて、俺をからかってんだろ」「ちょっと待つて、私が興味半分で君に接していると思つてる?」「じゃあ、どうして？　ちょっと歌がうまくて、面白いって冷やかしてるだけだろ」

すると真紀は隣にいた隆の手を握った。

「何するー？」

隆はうわずつた声をあげた。

それでも真紀は離さない。

「いいから……変なことはしないから、お願いや

真紀は懇願するように言った。

「おまえ、変だぞ、落ち着きないし……現実逃避だつて言つたな、俺はおまえの餌か？」

「そんな隆君にまたまた、質問です！」

「やっぱりこいつおかしいよ。人の話聞いてねえし

「今日わたしが急に来て、緊張していますか？」

「してねえよ、ボケ！」

隆が強く言うと、真紀は笑い声を上げた。

次第に夜が深くなる。辺りは薄暗くなり始めている。

「人生の参考になりました」

真紀はそう言って隆の手を力強く握った。

「何が人生だよ。大げさだな」

「あのさ、私のこと何があつても嫌いにならないでね」

隆は手をほどこうと引つ張つたが、真紀は離さなかつた。

溜め息をついて隆は言つた。

「何があるかしらねえけど、毎日電話かけてくるやつが、急に音沙汰なくなつたら、心配する」

真紀はクスリと笑つて、

「ありがとうね。これだけは言つておくナゾ、金持ちの道楽じゃないから、ここに来るのもね。若い男遊びに田舎の方が都合がいいとかね、そんなことないからね」

「おい！」

隆がいちいち反応するので真紀も面白がつてゐる。首を左肩に傾け、隆に寄り添つようとする真紀。

「置いて帰る！」

と、隆は踵を返したそのとき、

真紀は隆の背中に両手を回して抱きしめた。放心しする隆。

「よし、このときのことと思い出して乗り越える。「めんねありがとう！」

と、真紀は言つて自分から離れた。

指で田元をすくいながら、

「ごめんね、いきなり。今日はまたひとつありがとう！」

そのとき、隆は抱きしめられたといつことが頭の中で駆け巡り、真紀の震えるような声に気づいてはやれなかつた。

隆は松尾を避けるように、時間を少しだけ早め登校した。おかげで松尾には会わずに教室に入ることができたが、仏頂面でベランダから外を眺めていると、校庭からニヤニヤとした顔つきで階段を登つてくる松尾が見えた。

「めんどくせえ……いじられネタだろ……」

隆は席に戻つて寝たふりをした。

昨日、時間がぎりぎりだったために、駅まで急いで戻った。駅にはついたが、電車よりも車で空港まで行つた方が早いとのことで、真紀はタクシーに乗つた。

隆は抱きしめられたときの、衝撃を引きずつて言葉少なめだった。ついたらメールをするといつていたので、朝携帯を確認したところ、「本当にいろいろごめんね、しばらくは自重するね」というメールの内容だった。

どう返事をしていいのかわからない隆は、携帯電話を時折開いては閉じていている。

「社会的に抹殺されそうな、恋愛に励んでいる隆、おはよ！」

松尾は隆の首をつかんで言つた。

「うるせえな」

「おまえはわかっていない！」

「だからあいつは、金持ちで現実逃避をするために、田舎に時折逃げてくるんだって、こっちが地元らしいが、親も都会に住んでるから行くところねえんだろ」

「はいはい、普通は気をつかつてスルーするんだろうが、俺はあえて聞こいつ！ 昨日は何をしていた？」

そこで隆はがばっと起き上がり、

「おまえな……自称アウトローだろ、そんな話に興味持つな

「あ、都合が悪いときには俺のアウトローを認めてるよ

「とにかく黙れ　な」

「で、話は変わるが、昨日はあのあとどこに行つた？　フルハウスに行つたまでは知ってるから、そこはとばしていい」

松尾は隆の肩をバンバンと叩いて言った。

「話変わつてねえし、どうして知つてるんだよ……」

「や、俺も行こうとしたから、後をつけたわけじゃないぞ」「もうどうでもいい……ゼアイ行つたんだよ」

「ほー、あそこは綺麗な砂浜に展望台まであるな」

「だから、何ていうか、相談されたんだよ、これ、本当に」

「じゃあどれが嘘だ？」

と、二人が話しているうちに担任の村山が入つてきて、

「先生！　俺今日、ヴェルヴェッタアンダーランドの秘蔵ビデオ持つてきたよ」

と、松尾は言った。

「それはすごいな」

「今日は何もなし、適当に見てるわ」

隆はやる気なさそうに言った。

「先生こいつ！　音楽より女に走りそつです！」

「いちいち言うな

隆と松尾は同じような趣味を持つ担任の村山と、日曜日は事前に打ち合わせて学校の視聴覚室に集まって、各自持ち寄ったビデオやレコードやCDなどを楽しんでいる。

松尾が筆頭になつてこの同好会を、発足したのは言ひまでもない。

村山はロックやパンクの歴史に詳しい。

一応は同好会という形をとつてゐるが、毎週あるわけではない。

視聴覚室に集まって、松尾がビデオを村山に渡す。

「いい加減バンドのウォーカルとして、定着した方が曲作りも上手くいくだろうに」

村山は隆に言った。

「クリスマスライブのこと先生聞いたぞ」

「また松尾かよ……」

「おまえには才能がある」

村山はそう言いながら、ビデオデッキにテープをセットしている。「先生こいつまた誘われてるんですよ、えっとB組の羽柴だっけ?」

「いちいち報告するな」

「何か問題があるのか? 羽柴良太だな、彼は最近変わったな。先生たちの中でも評判になつてたぞ」

「それ先生! こいつのせいです!」

松尾は手を挙げておおげさに言つた。

「それはまた、どうしてだ?」

「見た目から直してこい! 話はそれからだ!」

松尾は隆の真似をして言つた。

「アリエネエ、俺そんなやつじやねえ」

「でも、悪くなつたわけじゃない、先生よくわからないが、羽柴はパツとしたな」

笑いながら村山はそう言つた。

「で、バンドには入るのか?」

村山は松尾が聞けないような肝心ことを隆に訊いた。

松尾はじつと隆を見ている。

「俺はもう人前では歌わない」

ぼそりと隆は言つて、

「隆が言つ情熱つてやつは持つてると思つぜー 何せあそこまでして見せたんだからな」

「いいから先生ビデオ見よう」

と隆が言つとこれ以上追求するのも悪いと思つたのか、村山は再生ボタンを押した。

隆は学校を出ると一人で、フルハウスに向かつた。  
何だかわからないが、むしゃくしゃしてゐるのだった。  
扉を開けるとマスターが嬉しそうに、「

「一日連続で来るなんて珍しい。前は良く来てたが、隆はカウンターに腰かけて、うつむいている。

「何かせ、マスターって周りのやつがみんな希薄に見えたときあった？」

「いきなり難しい質問だ、タカシ」

「どいつもこいつも同じような格好して、同じような考え方して、俺、そういうの見るとこやになるし、あれが好きだとか、これが好きだとか言つても結局は、そんなものかよみたいに……」

「若いなあ……タカシの言つてることは理解できる。でもな、人と違う価値観を持つて、それを愛していない人が駄目だつてわけじゃない、わかるかい？」

「どうしてだ？ 何度かバンド組んで、息苦しいったらなかつた」

「それで喧嘩して辞めるつて、椿ちゃんがいつも困つてたな」

マスターは髪を触りながら笑っている。

「先が見えてるし無駄だから、気持ちさえあれば努力もするけど、それすらない」

「宏大が死んでしまつてから、おまえも変わった。タカシはどうして歌う？ こんな質問もしばらく誰からもされていないだろ？」「どうしてかつて言われたら……歌わずにはいられないから、そうとしか答えられない」

「涼子は元気にしてるか？」

しめつぽくなつた雰囲気を、変えるようにマスターは言った。

「毎日うるせえよ」

「おまえ、涼子に歌を聴かせたことあるか？」

「あいつにそんなのが、わかるわけがねえ」

「そう思つてるのはおまえだけかもしれないぞ、タカシ」

マスターは、そう言つて、ちょうどビストロが入つて来たので、対応に追われた。

接客が落ち着いたのを見計らつて、隆はマスターに手を挙げてフルハウスを出た。

土手の石段に座り歌っていた隆だが、どうにも調子がよくな  
いのでしばらく川面を見つめていた。

真紀から三度目メールが鳴った。「怒ってる?」といふ内容だ  
った。その前は「「めんね」だった。

携帯電話のメモリーのギンガムチェックといつ欄のボタンを押し  
た。

暫くして電話は繋がる。

「もしもしし、私真紀です」

と、受話器口から聞こえたので、

「おまえ、何度もしつけよ、怒ってねえし今まで通りでいいから  
と、隆が言うと遠い声で、

「真紀さん、怒ってねえそうです。よかったです」「  
舞ちやんばかりと待つてちよつと待つて、勝手に電話取らないで  
よ」

雜音がして、

「「めんね隆君、今のは気にしなくていいから  
だから、昨日はいろいろあつたけど、怒ってねえし、今まで通り  
でいいから、おまえもあまり考えるなよ」  
「ありがとう、私緊張してる」「は? 昨日は会つても普通だつたら

「もう駄目、手とか震えてる」「  
なにやってんだよキモイな……とにかく、そういうことだから、

じゃな」「  
隆は電話が終わると瞳を閉じて、練習を再開した。  
今度は集中力が途切れるることはなかった。

隆が帰宅するとテープルには恵が作つた料理が既に並んでいた。  
バッグを置いて、腰掛ける。

涼子は酒の肴を食べながらビールを飲んでいる。

恵は柳眉を上げて台拭きで涼子の口元したビールを拭いて、空咳をし、

「いただきます」

と、言った。

「いただきまーす」

隆もそう答えて夕食が始まった。

隆が箸を、動かそうとすると、「バカ息子、フルハウス行つてたらしいな、電話あつたぞ……たまにはあそこに顔だしてくれ、俺のかわりにな」と、言って涼子はビールを片手に豪快に笑っている。

「マスターなんか言つてたか？」

と、隆が言つと、

「たまには涼子も顔だしに来い！ 怒られたわ」

と涼子が言つと隆は小さく笑つた。

「やけんメグがいつたやん、今日はフルハウスで『飯食べよう』ってことからだと遠いだろ？」「

「メグも楽できるし、マスターと話しきれるやん」と、惠は口をどがらせて言つた。

「来週行くか、しかしあの睨んでる[写真]にかなうんの？」

と、隆が言つと、

「それ、俺のことじやねえよな」

と、涼子が言つて箸が隆の眉間に直撃した。

俺から電話したのつて初めてだよな……。

隆は入浴から出でトランクスいっちょいで、そんなことを考えていた。

涼子はビールから焼酎に切り替わっており、顔は赤くなっている。恵はテレビを見ていた。

テレビ番組は歌番組をやっていた。それを必死に見つめる恵。

「おまえまた、こんなつまらんもの見てる」「

と、隆が言つと恵はキッと眉を寄せ恐ろしい形相で睨んだ。

隆は気おされ、

「わかつた、黙るわ」

と、言つた。

「初公開ですよね、それではSAYAさんの登場です」と司会役の女性が言つと、

真っ黒いドレスに身を纏つた、黒髪のスラッシュしたSAYAが登場し女性と男性の司会者と向き合つように座つた。

「動いてますよ、本物のSAYAですよ。写真と変わらず綺麗ですね」と、司会役の男性が言つと、

「これは凄いことですよ。TV初公開ですね」

「生番組です。SAYAさんが私の隣にいます！」

司会者は代わる代わる、大げさに盛り立てる。

SAYAの後ろには何人もアーティストが控えている。

「本来なら、ここですぐに歌つてもらつのが、この番組の流れなんですが、今日は少しお時間を取つて、SAYAさんに質問したいと思ひます」

司会の男性は言つた。

「歌つようになつたきつかは？」

司会男性はそう言つた。

SAYAはおずおずとマイクを持ち上げると、

「十五だったかな、母さんが言つには一歳のときだつたらしい。今思つと子供心にこつすれば親が喜ぶつて思つたのかな」

フレンドリーな話口調で言つた。

「そうですか、一歳凄いですね！ それでは質問を変えます

恵は画面に吸い付くように見ているので、隆が、テーブルにある食器類を流し台に運ぶ。「詞を書くときはどんなときですか？」

男性司会者から女性司会者に切り替わる。

「辛いことがあって、それがちょっと落ち着いたとき

と、SAYAは言つた。

「なるほどですか、そういうたどきに出ていくのうつな、素晴らしい作品が思いつくんですね」

「それでは質問を変えます」

男性司会者は、マイクを持ち直すようにして言つて、更に、「今日、この番組にて、緊張していますか?」

そう続けた。

「してねえよ、ボケ!」

隆はテーブルにあつた醤油差しを倒した。

それからテレビ画面を見つめて、

真つ黒いSAYAの格好やバックにいる他アーティストや、司会の一人が視覚から消えて、SAYAの顔、顎から上の部分だけがぼやけて見えた。

現実とは思えなかつた。そこに映つているSAYAはまぎれもなく、

昨日隆に抱きついた真紀だつたのだ。

「オラ! バカ息子テーブル拭きやがれ!」

と、涼子が怒鳴ろうとも聞こえてはいなかつた。

舌打ちをして、涼子は布巾でテーブルをふいた。

司会の二人は真紀の言葉に呆気に取られて、ほんの少しテンポが遅れる。

「SAYAさんはジョークがうまいですね。ツッコミですか」

と、男性司会者が言つと、後ろに控えているアーティストから笑いが漏れた。

「それでは歌の方に入つてもらいましょう。SAYAさんよろしくお願ひします」

女性司会者が言つとSAYAは立ち上がった。

SAYAは大勢観客が詰まつた場内、はりぼでのセットを見渡した。

ゆづくつとした足どりで階段を登つて、マイクがあるその場所ま

で行くと瞳を閉じた。

スタッフが早速カンペを出す。

「SAYAさん曰は閉じないでください」

と、一度目を開けてカンペを見てもSAYAはまた、目を閉じた。アーティストマネージャーである舞に、初めてだからあてぶり、口パクでいいと言われたがSAYAは、「初めだからこそ、それはできない」と断つたのだ。

バンドの演奏は始まった。

時間はコマ送りのように過ぎ、一秒ごとに心臓の鼓動が早鐘のように高まつた。

大型スクリーンはSAYAを投影している。

今だ、とSAYAは口を広げて、目を開ける。

観客と視線が合い、バンドの音が何倍にも大きく聴こえた。SAYAは伴奏が終わっても歌い出すことはできなかつた。体が石のように固まり目線まで凍りついたように動かない。後ろを振り向いたとき、SAYAは何かとても大事なものが、こぼれ落ちたような気がした。

忘れていた震える息づかいが聴こえる。

観客から遠ざかるように、一步前へ踏み出した。  
それからは驚くほど早かつた。

SAYAはステージを走り、逃げ出したのだ。

恵は顔を苦しそうにしかめて、

「どうしよう……」

と、涙を流している。

隆は未だに現実ではないような気がして放心していた。

恵の泣き声で、我に返ると、

「大丈夫、あいつは逃げても、逃げ切れるような性格してねえから、元気だせメグ」

と、胸を押さえ言つた。

涼子はその光景を肴に酒をあおつた。

奇妙な夜だつた。

もう寝る時間だとこゝの人に、恵はニュース番組を見ていたし、隆はいつもならすでに部屋にひきこもつてゐる時間なのに、時折、携帯をさわりながら、テレビ画面をチラチラと窺つている。

涼子は普段なら隆にちよつかにを出すといつて、静かに酒を飲んでいた。

音楽番組はあるあと、CMが入つて、SAYAの次に歌うアーティストが一曲多く歌つていた。

「メグ、そろそろ風呂に入れ」

と、涼子が優しく声をかけるが、聞いていない。

「隆、おまえもなんか言つてやれ」

「恵……好きなときに入れ、おにいちゃんは今日はおまえの味方」と、隆が言つと、

「めずらしこともあるなー！」いや明日は雪だな」と、豪快に笑いながら酒をあおつている。

妹は泣きほらした皿をこすり、浴室に向かつ。

もう口も変わらつとしている。

するとそのとき、チャイムが鳴つた。一回、一回と続けて、隆は跳ね上がるよう立ち上がると、

「俺が出来るー」

と、言って玄関に向かつた。

「こんな時間にどこのどいつだ、非常識なバカは！」酔つている、涼子も玄関に向かおうとしたが、隆が立ちはだかり、

「いいから、俺が行くつてー！」

「一家の大黒柱は俺じゃー！」

揉み合つになつてゐる。

三回田のチャイムが鳴つた。

浴室に向かおひつした恵は、JJの騒ぎを聞きつけ、玄関に向かつた。

隆と涼子は玄関でつかみ合いをしている。

そんな状況も無視をし、恵は玄関を開けた。

「待て！ 開けるんじゃねえ！」

と、隆が言った。

ガラガラガラと玄関は開いて、

「逃げて来ちゃった」

と、真っ黒い格好をしたSAYAが言った。

隆は頭を抱えるようにして、

「アリエネエ！」

と、言った。

恵は言葉も発することができないでいる。

「妹さん？ かわいい！」

と、真紀が言って、

「真紀、おまえ……何でことしたんだ……芸能人嫌いな俺でさえ、心臓が飛び出そうだぞ！」

隆は玄関であぐらをかけて座り込んでしまった。

涼子は、SAYAの服や髪を触つて、

「ありやー！」

と、言った。

「ねえ、隆君、妹さん紹介してよ」

隆は頭をかきむしっていて、

「ちくしょう！ だまされたよ俺！ 妹は恵でおまえの大ファン」

「ありがとうね、ごめんね、見てたよね……」

真紀は恵の頭を優しく撫でた。

それから涼子の方を向いて、

「本当に夜遅くにすみません……JJなりばれるJJはまざないと、

そう思つて来てしました。隆君とはお友達させてもらひます

「まあ、色々ある。気にすんな」

と、涼子が肩に手をかけると、

真紀は恵に抱きついて堰を切ったように泣き出した。

隆は天井を見上げた。

「あの、サンタクロースって私だつたんです。だから……初対面じゃないんです」

と、真紀は、命懸がいった。

「ライブのね、隆君と私が知り合つたのは妹さんのおかげ?」

「世の中どうなつてるんだ……」

隆は天井を仰ぐように言つた。

「さて寝るか、おまえらも適当に……」

涼子はふらふらと、寝室に向かつた。

「おまえどこで寝るんだ……」

真紀に向かつて隆は言つた。

「隆君と一緒に寝る。嘘」、

「おまえな……」

と、隆は言つて、立ち上がつた。

「もう風呂に入るな」一人とも、涼子が寝たし……明日の朝入れ

「うん、おにいちゃん、ありがと」

と、恵は言つた。

隆は部屋に向かつて、真紀もそれに続いた。

恵は居間の押し入れから布団を一組引つ張り出して、隆が寝ている、隣に置いた。

それから自分の部屋に入つて、布団を持ってきてその横に置いた。

「おい、メグ!」

と、隆が言つたが、恵は涼しい顔をしていた。

綺麗に三つ並んだ寝具の一番左に恵が入ると、その隣に真紀が入つた。

「なんか夢みたいや……」

と、恵は言った。

しばらくして疲れていたのか、すぐに寝息がした。

隆はチラッと真紀の方を見て、

「大丈夫か？」

とぶつときりまづに言つと、

真紀は、

「たぶん……」めんね……本当に」

と、言った。

「今頃、自分のしでかしたことの大きさに気づいたんだろう。でも、おれんちってな、常識とかそういうの全くないから、それに関しても気を使うな」

それから半拍置いて、

「おまえが逃げるなら、俺が前に進むから」

そう言つて隆が布団を肩にかけていると、真紀の腕が布団の中に入ってきて、手を握る。隆は、口を開きかけたが、何も言わなかつた。

「おやすみなさい、それと隆君の言葉、代弁するよついに使って」めん

「最後に一つだけ訊かせてくれ、どうして逃げた？」

隆は背を向けたまま言つた。

「隆君に会つて壁を感じたし、何より歌以外で自分が認められると思つと悔しくして」

「いいわけだろ？」

「ごめん、テレビに出るのが死ぬほどやだったの……」

「おまえ、今日ここに来て何度もごめんつて言つたよ……」

隆はそう言つて振り返りさらしさう。

「俺が訊きたかったのはおまえの本音。それが聞けたから、もう何も問題はない。おやすみな

と、言つた。

真紀は力強く隆の掌を握ると田を開じた。

帰つてこないと感じるだけで、こんなにもガランとしてしまうものだろうか、小城舞は散らかつた室内を無意識に掃除しながら、そんなことを考えていた。

何となくだがこうなることを薄々感じてはいた。しかし懐疑的な思考が絵に描いたように現実になつてしまつと、やはり途方にくれてしまうものだ……。

SAYAが逃げ、舞はマネージャーとしての仕事をまつとうとするべく、追いかけ当然のこと止めようとした。

「真紀さん！　真紀さん！」

一度名を呼んで腕を取つたが、予想以上の力ではねのけられてしまつた。

胸が痛んだ。舞は転びてのひらを床につけ後ろ姿を、見つめることしか、できなかつた。

こんなときに限つて、警備員は役に立たない。主要スタッフの少ない一般の出入り口を走り抜けSAYA是非常口に向かつた。

それからは怒濤のような展開になり、何度も名前を呼ばれたかすら覚えていない。

（田舎へ帰るように進めた、私がいけなかつたのかしら）

舞は携帯電話をソファーオンに投げつけた。

真紀のデビューは地元でスカウトをされ、卒業に合わせて上京するという形だつた。

当時、父の仕事の関係と重なり、うまくいくかと思われたが、真紀は歌手だけをしたいと、無理難題を言つて事務所を困らせた。それでも事務所側は押しでいいかと思つ込んでいたが、契約の段階でもめてしまい、当時のマネージャーと絶縁し、芸能人にはならないと真紀は言い出した。

そこでT-Yレコードに所属しアーティストマネージャーとして名

の知れた、小城舞を事務所側が引き抜き、真紀と会わせる。二人は歯車が合つたように親交を深め、アーティストマネージャーとしての垣根を越えて舞は仕事に従事することになった。

事務所側は真紀と対話を進め、二年間はテレビ活動は一切行わないということで一致した。渋々ではあったが、舞の説得も大きかった。

そして、名字だけ芸名の状態から、SAYAと改名し、なるべく自分のスタンスで、作詞とCDの得点としてつく写真集の構想を考え、それを総括し曲を提供していったのが舞だった。

写真集の価値を高めるためにSAYAの肖像権は異常なまでに確保されていた。

田舎に帰郷するというきっかけは、その異常な警備体制が招いたといつても過言ではない。真紀自信が契約が切り替わるということで周囲に敏感になってしまったのだ。

そこで舞は警備をしない方針で田舎へ帰郷することを真紀にすすめた。

すべてが裏目に出てしまった。

音信不通、行方不明、失踪といった文字がワイドショーなどでは既に踊っていた。

隆は携帯音楽プレイヤーを片方の耳へずつと押し当て授業中もSAYAの曲を聴き続けていた。

なぜそうなったかは朝の恵の一言から始まった。

「おにいちゃん、これSAYAの曲、評価とかそんなことじやないんで。知らんとだめやけん」

と、恵は言って隆に愛用のプレイヤーと写真集を渡したのだが、当然隆は、一度嫌な顔をし、思い直したようにそれを手にした。

SAYAとして真紀として身近すぎて評価どころではなくしかし、着眼点はいいような気がした。オールディーズな曲調とSAYAの声は合っていた。

机に入れてある教科書よりも幾分小さな写真集をめくる。妙な気分なのだろう、複雑な顔をしている。それもそのはず、S

A Y Aは真紀であり真紀ではないのだから。

教卓に立つて朗読をしていた村山は下を向き、いかにも授業を聞いていないという隆を指名した。隆は視覚と聴覚を半分以上奪われてしまっているので気づかない。

村山はあきれかえり、やおら近づき、写真集を机から引つ張り出し、

「隆はこんな趣味もしてたのだな」

と、言つた。そしてイヤホンを取つて、

「これは」POPなのだな、珍しい……にしてもだ、今は授業中だぞ！」

と多少語氣を荒くし、村山は教科書で軽く隆の頭を叩いた。

写真集の開いたページのSAYAはそのちょっと、大胆な姿だつたりしている。

クラスから笑いが漏れる。

一番先頭に立つて大笑いしているのは、松尾で椿に至つてはギヨツとしている。

村山は没収すると、授業を開始した。

昼休みになると早速松尾が、隆の奇行に言及している。

「あの隆がな！ 最近のおまえは変だぞ」

と松尾は言つて笑つている。

隆は机を寄せながら、

「恵が押しつけたんだよ！ しかたねえだろ？ が！」

と言い返す。

「おまえはそれでも絶対に、メグちゃんの言うことなんて聞かないだろ。や、音楽の話で人の意見なんて耳を貸すわけがないぞ」

隆は言い返せないでいる。

昼食の用意を済ませると隆は松尾に、

「俺ちよつと用事あるから… じゃ」と、言つて逃げだした。

「おい、逃げるな、逃げるな！」

松尾は腹を抱えて笑つている。

「アウトローな俺もショックが大きいぞ！」

と、教室から出て行く隆の背中に向かつて言つた。

職員室の扉を開けると村山と田代が立っていた。

隆は村山のもとまで行つて、

「先生、あれ妹の大事な物だから返してほしい。授業中は絶対に聴かない」

と、言つて頭を下げる。

「そうか、おまえはふまじめだけど筋はいつも通つてるからな。今回だけだぞ」

村山は引き出しを開けて、隆に携帯音楽プレイヤーとブックレットを返す。

他の教師がチラッとそれを見て眉をひそめたが、温厚な村山は珍しくにらみ返す。

教師はばつが悪そうに新聞を手に取つた。

「ありがとう」

隆はそれを抱えて職員室を出て行った。

教室に戻ると良太が廊下で隆を待っていた。  
隆に気づいて、一瞬申し訳なさそうにして、

「あの…」

と、いつものように言つてきたので隆は、「俺、食いながらでいいか……そつか、おまえもこつちで昼すませるよ」と、言つた。

「え？」

と、訊き返す良太。

「いつも俺は食べながら話聞いてるだろ、おまえ昼休み減るだろ」

隆がそう言ったので、

「ほんとに、一緒にいいんですか？」

「どうして嘘付く必要があるんだ？」

「あの、恭ちゃんも連れてきていいですか？」

隆はうなずくと教室に入つていった。

しばらくして一人は教室に入つてきただが、良太は何度かきているので慣れているのだが、恭介の方はおどおどしている。

隆は、すいている席を指さして、

「その机寄せろよ

と言つた。

「でも僕たち、立つて食べられますから」

「俺がおちつかねえんだよ、なあおまえら、ちょっとといいだろ」

隆は近くにいた、机の主の生徒に言つた。

「別にいいよ。俺らどうせ昼休みは体育館だしね」

と、言つて、二人の生徒はそのまま教室を出て行く。

良太はその後ろ姿を見て、

「きれいに使いますから！」

と、大げさに言つてる。一人は笑いながら出ていった。

隆と向かい合つている松尾は、腕を組んで何やら考え込んでいる。

良太と恭介が机を寄せて弁当を広げ食べ始める。

良太はワインナーを手に取つて、につこり。とても幸せそうだ。

恭介は物静かに一人分よりは多めのその弁当を片手に持つた。

そんなときだった。隆が「ぐく自然に風が窓辺から流れるように言ったのは、

「俺、バンド入ることした」

良太はワインナーを落とし、恭介は固まつた。

そして松尾が大声で、

「しゃ！」

と、一番無関係にも関わらず喜んでいた。

椿はやりとりを盗み聞きしており、

「よつし」

と、言つて「じぶしを握つた。

発起人である良太が一番遅れて、

机に落ちたワインナーをフウーフウーと息を吹き付けながら、口に入れて飲み込み、モゴモゴとやって涙ぐんだ。

「よかつた……毎日毎日ここに来て今日はお弁当も一緒に、僕……僕！」

と言いながら喉を詰まらせ、それに気づいた恭介が背中をさすっている。

「おまえら本当におおげさだな」

と、隆が驚いて言つた。

「おまえが一番、これがどういうことが、わかつてない。良太でかしだぞ、おまえもアウトローだ！」

と松尾が言つた。

「まったくアリエネ」

と隆が言つと、じつそり聞いていた椿は机に顔をつづめ、目元を手で覆つて肩をふるわせている。

「話の腰を折るようで悪いが、ちょっと最近家のことで『タタタタ』として、すぐことはいかないぞ、良太、面倒だから登録して」と携帯電話を良太に渡した。

そこで恭介が立ち上がり、硬い動きと妙に大きな声で、

「俺、橋本恭介です。よろしくお願ひします！」

と言つた。

隆は立ち上がり恭介の手を取つて、

「俺は隆な、よろしく」

と良太と恭介の双方を、見つめながら言つた。  
ともかく隆がバンドに入った。

「一人は楽器はどうした？ 前は持つてないつていつてたが……」

「まだ細かいことは決まってませんが、山中さんが言つには」

早速松尾が良太と恭介に対して根掘り葉掘り、質問を繰り返しているが、椿の名前が出たときに良太の口を慌ててふさいだ。

隆はそのとき授業中と同じように、片方の耳にヘッドホンを入れていたので気づいていない。

良太はわけもわからず、松尾を見返している。それを見た恭介が、「俺がドラムで良太君がベースがいいと……」

隆はブックレットを広げようか迷っている。

(俺がSAYAを否定してどうするんだよー)

隆はページをめくつた。

松尾は横目で隆の行為を確認しつつも、「なるほど、良い判断だ。だが買うのか？ ベースはともかくとして……」

と、言った。

「ですよね……練習も、どうすれば良いんだろう……」

と、言って良太はうなつた。

「隆がバンドに入るって決まつても、まだバンドを結成したとはいえないな」

と、松尾が辛口の意見を言った。

良太は更に追い詰められたが、瞳に力を込めて、「でも僕たちあきらめません！」

と、強く言った。恭介もうなづいている。

「まあ、俺に考えがないわけじゃない、何もかも一瞬で決まる方法を知っている。良太！ 恭介！ おまえら情熱ってやつは持つてるよな」

と、松尾は念を押すように言った。

「俺、うまくは言えないけど、何をしてるときでもチリチリと胸の中にある」

そこから良太が受け継いで、

「いつも変わりたいとか、こうなりたいとか夢見るようなこころです

よね、それって

と、二人で言った。

松尾は腕を組み深くうなずいて、

「それなら大丈夫だ、少し時間はかかるが俺が解決してみせよう」と、言った。

「本当ですか？」

良太がそう言うと松尾は威張りくさつたような態度で、「俺様に任せろー！」

と、言った。

「よかつたね良太君」

と、恭介が言うと、良太はブイサインを作つて、

「やつたねブイ」

満面の笑みで答えた。

丁度そのときチャイムは鳴つて、一人は結局弁当は半分も食べられなかつたのだ。

テレビから小さな音が流れ、何度も何度もループされるその映像を遠巻きにするように、眺めている。

チャンネルを切り替えると繰り返されるその光景を、とても自分がしでかした、ことではないように視界に收めていく真紀。

真紀はワイドショーに映る自分を無表情に眺めている。

逃げ出した前後、まるで大きなハサミにでも切り取られたように、記憶がない。

今でも時折、フラッシュバックのように緊張がよみがえる。

そんなとき舞がいつも口を酸っぱく言つていた、ことを思い出していた。

「真紀さんは自分の感情に疎いんです。回りから見ればただの脳天気に見えます」

舞は肝心なことに限つて言わない性格を直してほしいと伝えたか

つたのだろう。

真紀は考えるのも恐ろしくなったのか、立ち上がった。

この家はどことなく寂しい。隆から広大の話を聞いている先入観から、きているのかも知れないが……。

真紀は居間から隆の部屋に入るとレコードプレイヤーの前に座り込み、しばらく黙考しレコードプレイヤーに針を落とした。

SAYAとしても尊敬しているロックな音楽が軽快に響いた。

笑みがこぼれた、この曲は確か……。

真紀は音楽を鳴らしたまま、立ち上がり部屋をぐるぐる扉を開けようとしたが、アコードディオンドアに仕切られた奥の部屋が気にかかり、そちらを開ける。

雑然とした部屋だつた。ランドセル、使い古した教科書、ロックバンドのポスター、奥にはパイプベッドがあつた。そのベットは今でも眠れるように布団が敷いてあつた。

掃除をしていないのだろう、物には埃がかぶり部屋全体がカビ臭かつた。

そこで真紀はふと気づいた。ここが隆の本当の部屋なんだと。

昨日寝て、普段隆が使っている部屋は生前広大が使っていた部屋なんだと、もう一度レコードがある部屋に急いで戻り室内を確認した。

やはりそうだ、隆は広大の部屋を自分の部屋だと思い込んでいるのかも知れない。

若しくはそれに気づいていて、現実を見ようとしないかだ。

潔癖に自分の信念を曲げず、大人びている隆。

真紀が芸能人だと知つても、態度を変えない隆。

カリスマも含め 悲しみを知つているからこそ、成り立つのだ

と。

自分がだけがどうしてこんなに不幸なのかと、考えていた真紀は、

それがどれだけ甘い考えなのかと思い知つた。

くすおれる真紀、

(「みんなさー、みんなさー）  
涙がとめどなく流れた。

隆は悪びれもせずに言った。

「おまえ歌下手な

今までどれだけ切望しても、誰もが、

「セイはちゅうと、いわ行きましゅうひやさん」

だと、抽象的なことで伝え濁されてきた。真紀は

にこの言葉を聞けた。

おやかずの高校生に言われるなんて思ってもいなかつただやる

不思議と穏やかな感情だった。

「ありがとう、私は誰かがそう言って怒ってくれるのを待つてた」

真紀：阿リーナー 真紀：阿リーナー  
を入れて隆と歌つていたのだ。

てきた。

始めは反対していた隆も真紀がずっと家の中にこもって、テレビを見ているよりはいいと思ったのだろう、外に連れ出した。恵は変装をしたほうがいいなどと聞いたので、隆は余計に田立つとそれを断つた。

「おつかれ？」  
一変なせり、不思だいと誰われて誰なんでも。せいじ黒かにじんを誰

と、隆が言うと真紀は、

「ちよつと待つてちよつと待つて

と言つて慌てた。それを見て隆は笑つてゐる。

「今日はせっかちやつて外に出たけど、これが俺の徒歩の範囲を超える

と危険だな」

「SAYAがいるなんて誰も思わないかも」

隆の現実的な提案に樂観的に答える真紀。

「普通はそうだな。だけど、帰りに駅やホテル、

ら帰つたんだけど、マスクミミだらけだつたぞ

「それで、テレビでも地元にいるなんて言つてるんだ」

「おまえ……どうしてテレビ衣装のまま来た」

「無我夢中であまり憶えてません」

「どこのシンテンツーリーだよ」

「でも、空港からタクシーでここまで直通したとき、運転手さんこ  
絶対に言わないでって言質を取つたから大丈夫」

「アリエネエよ、途中で降りて俺に電話するとかしらよな」

「ごめんねえほんとに……」

「しめつぽくなつてきたので隆は慌てて、

「べ、別に攻めてるわけじゃねえ」

と、言つた。

「隆君が私に味方してくれてるよつこ、私も何があつても君の味方」

真紀は目を細め隆を見上げる。

恥ずかしそうに隆は顔を背ける。

「アリエネエ、始めはただの柄繫がりだつたのに俺ら」「

「ちょっと待つてちょっと待つて、ひどいよそれ」「

「でも、本当だろ」

二人は笑い、歌い始めた。

恵のはつくりようは異常だつた。

夕食はちゅうどどこの料亭でこれを出しても、おかしくないほ  
どである。

隆はため息をついて、

「恵……この人数でこんなに食べられるか」と、言つている。

テーブルいっぱいに並んだ料理の数々、

素直に喜んでいるのは、真紀と涼子だつた。涼子は早速ビールを片手にやつている。

それぞれ席につくと、

「いただきます！」  
と、真紀が言った。

「召し上がり

恵はとても幸せそうだ。

テレビも何もつけていない空間の中が、まるで灯りがポツとい  
たように華やいだ。

夕食になると、毎日喧嘩をしていた隆と涼子も今日は平和である。  
「メグちゃんありがとう、どれもおいしくよ！」

真紀は、うれしそうに言つた。

「真紀さんのために朝早くから仕込みをしたけん」  
恵はいまだに芸能人が、この家にいるのは信じられないのか、伏  
し目がちである。

「ありがとうございます、でも、そこまでしてもらひの悪いかから  
申し訳さそうに真紀は言つた。

「まあたまにはいいだろ、バカ息子の友人（？）は少ないからな！  
姫もいっぱいやるか？」

涼子は焼酎に切り替わつており、大げさに笑つと言つた。  
コップに焼酎を注ぎ、真紀に渡す。

「少しだけ頂きます」

「おい！ おまえ大丈夫かよ」

と、隆が言つたが真紀は少しと言つたのにも関わらず、半分くら  
いついであつたそれグビグビと飲み干した。

「良い飲みっぷりだ。バカ息子姫もいい大人だ、口を挟むんじゃね  
え！ 明日は俺も休みだ！」

涼子はいつも一人で飲んでいるので、真紀が飲んでいることを快  
く思つている。

「俺しらねえぞ、どうなつても」

とは言つたものの、真紀の精神的な面を考えても酒くらい飲んで  
もばちは当たらないだろうと感じているのだろう、深くは言わない  
でいる。

夕食も終わり恵はやおら立ち上がると片付けを始める。

明日の弁当は大層豪華になるだろ？

真紀も手伝うべく立ち上がりかけたが、顔を真っ赤にフラフラとしていて、それどころじゃない。

「じつそつさまでした」

と、真紀が言つと、

「お粗末さま」

と、恵みが返し真紀を緊張した面持ちで支えた。

「おにいちゃん、枕と毛布持ってきて」

「なんで俺が」

と言いかけたが、押し入れから枕と布団取り出し、真紀を寝かせている頭の部分に枕を当て毛布をかけた。

真紀が眠りについてから、いつもの日常に戻ったようだった。

しかし隆は自分の部屋から出て、居間で寝ている真紀を見る度に、ここが自分の家なのか、一瞬わからなくなるのだった。

夜も更けそれで眠りについていた。

朝方隆は、何かにつつかれていたことに気がつき戸を開けた。

「隆君隆君、起きて」

真紀は隆の頬をつづいて言つた。

「何だよ、何があったのか？」

と、寝ぼけ眼をこすり隆はかすれた声で言つた。

「お話をしよう……」

「勘弁してくれよ……何時だよ」

「今ね、四時」

「これじゃあ前と何も変わつてねえ、アリエネーよ」と、隆は言いながらまた、目をつぶつづつするので、真紀は慌てて、

「ちよつと待つてちよつと待つて」と言った。

ともかく夜が終わるといつていい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7681z/>

---

ウレハ

2012年1月8日19時48分発行